

積極的に活動した消防団

岩手県田野畑村消防団
第1分団第1部 分団長

中嶋 恭一 (58歳)
消防団歴 30年 (自営業)



田野畑村の概要

岩手県の東部中域に位置する田野畑村は面積156.19km²、人口3,976人（平成22年4月現在）の村である。大部分が山林で、平地はわずか16%程度の山間の地形で、東部の海岸線は豪壮な断崖となっている。

水産業と酪農を主な産業とし、ワカメやコンブの養殖、サケやアワビ、ウニなどの捕獲、高品質の牛乳や乳製品をつくっている。

宮古地区広域行政組合の構成地区で、消防団としては4分団4部から成り、団員数は216名である（平成22年4月）。第4分団第1部の担当領域は海岸付近がエリアの中心である。

明治、昭和に繰り返し経験した大津波再び

岩手、宮城、青森、北海道を襲った明治29年の明治三陸地震津波で、田野畑村は最大波高29mを記録し、232人の死者を出した。田野畑村の住民は、漁業を営んでいる家庭が多く、便利さと先祖代々の土地を離れることへの抵抗感からその津波の後、結局、元の場所に戻ったり、その後、木炭積み出し港として発展した経緯があり、他所から入ってきて明治津波を経験していない、そして津波に対する知識のない新住民が多く住んでいた。

そのような状況下で、昭和8年、再び津波に襲われ103人が亡くなった。昭和三陸地震津波である。

この二度にわたる甚大な津波被害を経験したことで、国や県の低金利融資で高所移転が促進された。田野畑村もその際、高所移転した集落の一つである。地震による津波被害を防ぐためにハザードマップも作られていたが、3月11日の大津波はその想定を凌駕する規模だった。今回の津波で田野畑村にあった高さ8mの二つの防潮堤は、ともに津波を抑えられず、田野畑村の人的被害は、死者14人（羅賀地区では7人）、行方不明者15人、負傷者8人、住宅被害は、全壊225棟、半壊45棟という被害を出した。

前を向いてチャレンジしていく観光事業

田野畑村では、立寄り型観光から、三陸の自然や海の暮らしの魅力を村民が伝える体験をベース



ぼつんととり残された平井賀水門



破損した防潮堤

にする滞在型観光の基盤作りを進めていた。

三陸らしい漁村の風景があり、昭和50年代まで海産物の保管や漁具の収納場所として、浜作業や寝泊りの場として盛んに使われていた木造番屋があり、それを地域の宝として漁村文化を語り継ぐ場として保存し「番屋エコツーリズム」を提供してきたが、今回の津波で全部流され、重要な観光スポットを失った。しかし、NPO法人 体験村・たのはたネットワークは、これまで提供してきた「サッパ船アドベンチャーズ」や「北山崎ネイチャートレッキング」などの自然体験プログラムを再開し、観光事業の継続と拡大に立ち上がっている。海を臨む田野畑村最大のホテル羅賀荘は大ダメージを受け、無期限休業中になったが、復興モデルの一例として、今後の震災復興に役立つべく、平成24年春には学生の宿泊を受け入れての営業再開テストを目指して「羅賀荘再生プロジェクト」が推進されている。

かつて昭和津波のあと、鳴門から来た技術者の協力で鳴門伝統の灰干しワカメ製造で田野畑村が復興したように、田野畑村はすでに前を向いて動き始めている。

仙台から2日ばかりで戻る

私は、仙台市のホテルで結婚式の披露宴に出席中に大震災に見舞われた。沿岸部でなく、仙台駅の反対側のホテルだったのは不幸中の幸いだった。とにかく、天井が崩れたらえらいことだ、と思うくらい大きく揺れて、ホテルマンに誘導されて公園に一旦避難した。すぐに地元に戻ろうとし

たが、簡単にはいかなかった。高速道など道路が寸断されていたので、その日は帰れなかった。ガソリンも半分しかなかった。近場の小学校の体育館が避難所として確保されたので、そこに行ったが暖房も電気も毛布もない寒い中、椅子で仮眠した。翌日、国道4号が通行できたので、ガソリンは足りないけれど、とりあえず行動せねばと動いた。一関まで来たら開いているガソリンスタンドがあった。相当渋滞していたが2,000円分のガソリンを入れて盛岡までたどり着いた。盛岡でもガソリンスタンドの長蛇の列に並んだが、スタンドが閉まってしまってその時は給油できなかった。幸い、私には盛岡にも家があったので、そこで一泊して、翌日早朝からガソリンスタンドに並んで給油して移動を再開した。国道106号と455号も交通規制で、ほとんど通れない状態だった。運良く田野畑村出身の駐在の警察官がいたので、「消防の仕事があるので通してください！」とお願いして、ようやく田野畑村に戻った。

命を捨ててまで水門を閉めるのか

田野畑村消防団は4分団制で、私の第1分団は2部制をとっていて、35名定数の分団である。受け持ちエリアは羅賀地区で、ここは最も大きな被害を被った。そして津波の際、県内でも一番危険な所かもしれない明戸海岸に水門があり、その水門を閉めなければならない。遠隔操作は計画中だったが、現状は手動だった。水門は全員が閉められるように訓練しているが、係としては常時地元にいる自営業や漁業の方に頼んでいる。

水門は、我々消防団員が閉めてから逃げなければならないので、今後はそういうことも問題になると思う。やはり水門は遠隔操作で行うようにしてほしい。

今回の大津波で、水門閉鎖のために殉職された消防団員がいるが、地震の大きさの伝達が来て危険であれば消防団員だからといって、命を捨ててまで水門を閉めなくてもいいから、とにかく高い

所に避難させる、自分も避難する、ということが基本なのではないかと思う。訓練では必ずやっているし、やらされているし、私も指揮をしながら警らさせて構えているが、今回のような場合は逃げるが勝ち。もちろん住民を高台に避難はさせるし、誘導もするけれど、それだけで精一杯。自然の力だからどうにもならない。

女性協力隊の役割

普段から宮城沖地震が来てもおかしくないと想定して訓練はしていた。避難誘導の看板とか、自治体にもハザードマップがあって、自治会と消防団が連携をとりながら訓練をしていた。地震がいつ起きてもという想定のもとで、岩手県内の大学や行政が作成したマニュアルを使って説明会を開いたり、それに沿って消防団も活動していた。ハザードマップは地域に浸透してきていた。

このエリアでは漁などで男が海に出てしまうため女性が陸に残る家庭が多い。それもあって女性の協力隊があり、火災の際の初期消火や消火栓を使用しての放水訓練など、毎年分団主導で実施している。女性協力隊は、非常時に炊き出しをしたり、お年寄りをリヤカーなどで移動させる役割を担ってもらう体制になっていた。今回、物資そのものは田野畑村には速やかに十分届いたのだけれど、食糧については、バナナ、パン、水というようなものが毎日続いた。実際にそういう時に炊き出しなどがすぐにできればいい。

幸わいだった村機能と道路の確保

盛岡の家は家具も倒れているような状態だったが、田野畑村の自宅では、家具はそのまま倒れていないし、物も落ちていない。震度は田野畑村も高かったが、震度と実際の状況とは違うことを実感した。

盛岡市や一関市あたりでは道路が寸断されてい

たが、このエリアは道路被害がなかったので、岩泉市から来る道路が確保され、物資もすぐに来た。

役場、分署などは高台にあって被害を受けず、村としての機能が確保されていたことも大きかった。高齢者は、南は宮古市、北は久慈市の病院などに三陸鉄道で行くのが通例だったが、鉄道機能が失われてしまったので病院に行けなくなった。それについては、田野畑村の診療所の先生が休みなく診てくれたので窮することはなかった。

人の出入りの制限

震災直後しばらくは、避難している人は地元の自治会の方でも現場に入らせないようにした。自分の家を見たいなどの個人の感情が出てくるので、まず会議で、避難所にいる人は自分の家に戻さないというのを決定して作業をした。良い例ではないと思うが、人の出入りがあると、盗難など色々なことが出てくるので、そういう意味でも立ち入らないようにした。避難所にいた方は、十数日経つまでは自分の家に戻れなかった。

井戸水を汲み上げて対応

避難場所のアズビィホールの電気は翌日から復旧していた。私が着いたときには暖房も電気も十分あった。しかし、各家々の電気の復旧は4月の初旬までかかった。集落では、下水道が整備されていたが、電気がなければ下水道が使えないというのが不便だった。そのため、トイレも仮設トイレを皆で使った。

昔から水の確保が大変だった地域なのに、今回、水源地がやられたので、水は4月半ばくらいまで不自由した。田野畑には大きな川があるわけでもないのに、地区ごとにある井戸水を汲み上げて対応した。

積極的に活動した消防団

消防団員は朝食を7時頃にとらせてもらって、役場の談話室に7時半に集合して作業に入り、夕方4時半に再集合して、行政、警察、自衛隊と会議をして、次の日の捜索工程を決めていった。消防団員は地域のことに詳しいので、地元消防団の意見を中心に警察や他の組織が動いていた。瓦礫撤去の建設業者の誘導も消防団が行った。

消防団員の作業としては、流された車の中に人がいないかどうか、壊れた建物や瓦礫の中に人がいないかなど、まず人の捜索が主だった。道路は車が動けない状態だから、重機を入れて瓦礫を撤去しながらの捜索とし、並行して道路を作っていた。そのような活動を3月末まで毎日行った。警察は人数が限られていたが、自衛隊は北海道など色々なところから100人~200人規模で来てくれていて、消防団員と一緒に人海戦術で動いた。あの頃はまだ寒くて天候も悪かったので、遺体の収容作業等は警察や自衛隊に頼んだ。

消防団員の確保を

消防団がないと地域の防災が成り立たないのは確かだ。ましてやこれから高齢化社会になるし、昔であれば一世帯で1人は強制ではないけれど、消防団に入らなければならない、という流れがあったし、男の人が入らなければ女性協力隊という形で奥さんが入る、というのが基本的なことだったが、今はなかなか厳しい。若手が戻って来ても、そういう組織を嫌いであるなど、勧誘するのが大変で人員確保が難しい。今回の件で意識は変わってきたと思うが、顔を知った中で勧誘をする形、つまり地元に着定している若者や、一旦外に出ても戻ってきた者などを対象に地道にやるしかない。

※「家族であつてもてんでんこ」…家族であつても、それぞれが動く、という意味。津波でてんでんこという場合もあり、それは、津波が来たら親や兄弟にも構わず、自分の命は自分で守るためにとにかく逃げろ、そうでもしないと逃げ切れない、という言い伝え。
※畠山栄一…田野畑村の消防団で活躍し団長を務め、村会議員、漁協協同組合長も務められた方で、平成22年に亡くなられた。



大津波の直撃を受けたホテル羅賀荘。4階まで津波が来た模様。当日の宿泊客及び従業員は上層階に逃れ、犠牲者を出さずに全員避難し無事だった。

家族であつてもてんでんこ※

この地には、昭和三陸津波で生き残った畠山栄一※さんの「家族であつてもてんでんこ」の教えが根付いている。

住宅は、昭和津波の到達点を基準に、ここまで高台に上げれば大丈夫、ということで建てているが、今回はそれ以上の大津波だった。前回ここまでだから、今回はここまでは来ないだろう、と思った方もいると思う。震源地に近かったら津波の到達時間も早いだろうし、前と同じで済むとは限らない。だから地震の揺れの大きさ次第では、「まず高い所に逃げる！」が第一だ。津波が来るまで若干時間があるが、それで油断すればみんな命を無くしてしまう。

私は現地にいなかったから定かではないが、初めは3mの津波という情報が流れたようだ。訂正情報が出たのかどうかかわからないが、津波が来た時点で沿岸部の施設も防災行政無線も流されているから、肝心の沿岸部で情報は何も聞こえなくなって、被害を受けない内陸部だけが防災行政無線が聞こえている状態だったようだ。

「家族であつてもてんでんこ」…今回の震災でそういう思いがまた膨らんで、そのとおりでないと、私は感じているし皆もそうだと思う。

駅舎も跡形なくなった 沿岸部での活動

岩手県田野畑村消防団
第2分団第1部 分団長

佐々木 茂 (59歳)
消防団歴 30年 (森林組合)



しまのこしえき 流されてしまった島越駅

田野畑村の沿岸部には三陸鉄道が走り、村内には田野畑駅と鳥越駅の2つの駅がある。いずれも「カンパネラ田野畑駅」「カルボナード鳥越駅」という、宮沢賢治の作品に由来する名前もつけられている。今回の被災で田野畑駅は残ったが、第1部担当エリアにある鳥越駅は津波の直撃を受け、高架は崩落し、駅、プラットホーム、そして優美な姿だった駅舎はすべて跡形もなく流されてしまった。唯一宮沢賢治の歌碑だけが奇跡的に残った。三陸鉄道はまだ全線で運転が見合わされており、いまだ再開のめどはたっていない。(平成23年8月現在)

田野畑村の沿岸部については、170世帯くらいあったのが100世帯くらい被災し、集団移転の話も出ているが、移転しても残っても大変である。

地震発生後すぐに地元へ向かう

地震が発生した時、私は宮古市にいた。もの凄く大きい地震で、「即帰らなきゃなんないなあ」と思って、自宅に向かった。宮古市で緊急通知が携帯電話に入っていたが、それをただメールかなくらいに思っていたので、大津波情報も何も聞かないで、とにかく急いで車で田野畑村に向かった。

宮古市でも津波に遭わず、途中の旧田老町辺りも津波が来る前に通ったので、交通規制がなくて結構スムーズに走れたが、小本のトンネルまで来たら津波がやってきたので通行止めになった。そこからちょっと戻れば山道があるのを知っていたので、岩泉町を抜けて、田野畑村に戻ることができた。普通だったら1時間くらいの道のりだが、1時間半かもう少し掛かったと思う。

地元に戻って団員と集結、そして搜索へ

連絡をとろうと思っても携帯電話が不通だったので、とりあえずアズビィホール(=指定避難所)に行った。みんな避難していて、団員が来るのを待ったり、団員との連絡もそこでとるようにした。この時電気は消えていて、自家発電もな



震災前のカルボナード鳥越駅の駅舎(後方に鉄道の高架が見える)



震災前の宮沢賢治の歌碑と三陸鉄道

く、携帯電話も繋がらなかったため、連絡をとる手段が全くなかった。

屯所は、高台にある屯所（防災センター）と海に近い旧屯所があり、高台の屯所は駐車スペースがなく、うちの分団では、団員が集まるときは高台の屯所から1本道で行ける旧屯所が使い勝手良かったので、普段はほとんど旧屯所を使っていた。この震災で高台の屯所は難から逃れたが、下の旧屯所は全部なくなってしまった。

アズビィホールでは、ある程度連絡がとれて、帰ってこない団員が誰々か、誰々が心配だというようなことに対応し、そしてその時「避難する時に亡くなった人を確認して、その亡くなったお2人を高台に上げて置いてきた」という話を聞いて、すぐに遺体を置いた場所の情報を集めた。

震災翌日から連日の搜索活動

次の日は、朝早くから消防団員を召集したが、その際遺体があるのを知っていたので、最初にそこに行って収容をしてから搜索に入った。自衛隊は多分まだ入る前だったが、警察は入っていたので、搜索して遺体を見つけたら警察に連絡して、警察が収容するというようになった。

素手では無理だったので、重機が来た。それから、瓦礫の中に遺体があるかもしれないので、重機の周りに消防団員をつけて、重機で見えないところを団員が監視して搜索した。

警察と一緒にいたが、警察官は人数も少なく、遺体が見つかったというところに行くしかなかったため、搜索活動の主体はやっぱり消防団員だった。自衛隊が入ってくると搜索体制が整ったが、自衛隊が入って協力してもらうまでの10日間くらいは団員だけだったので大変だった。

特に、うちの分団では団員が4名も亡くなって、人数も限られていたから厳しかった。とにかく、最初は朝5時に集合して、夕方4時まで搜索し続ける毎日だった。集合場所を最初の2日は役場にしましたが、役場からまた現地に行くよりは現地のどこかに集合した方が効率的だということで、3日後からは現地に集合するようにした。田野畑村消防団には4分団あるが、それぞれを二つずつに分けて適宜集合して活動した。

活動する中で、防災行政無線が復旧するまで一番不便だったのは、連絡がとれなかったことだ。仮設にいる者や親戚の家にいる者など、自宅以外にちらばっていた者も多く、携帯電話もつながらず、連絡がとりにくかった。活動する中でも、時間や場所が変更になることもあるし、とても困った。

あと、車が結構流されたので、移動するにも乗り合いにならざるを得ず不自由した。ただ、ガソリンは緊急車両ということで確保できたし、道路に陥没などはなく通行できていた。

無我夢中の作業から我に返ると

団員が4名も亡くなったということについては、普段の生活の中で誰かが亡くなったのとは気持ち的に違った。まだ亡くなっていないような感覚があり、団員間の中で心の動揺などがそれほどなかったのは幸이었다。

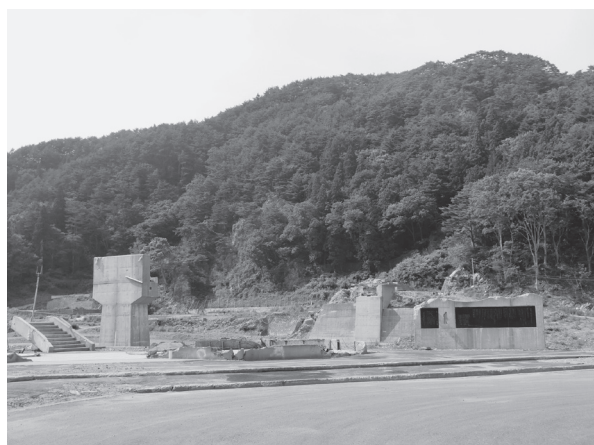
信じられないような津波に遭遇したが、次の日の朝から10日も一緒に行動して搜索を行って、1人ではなかったことが良かったのかなと思う。自分も自宅が全部流されたが、同じ境遇の団員が結構いるので、搜索している時喋ったり冗談を言っ

たりしていると、それ程悲観的と言うかショックは感じなかった。親を亡くした団員も、次の日から一緒に捜索しているので、見ているも悲観的な感じはなかった。ただ、捜索活動が終わってから、仲間がばらばらになって1人になるとあれこれ考えてしまう。避難所もごちゃごちゃしているし、家族が何処にいるかも分からないから、家族のことも当然気になった。

今回の被災の捜索活動後、「遺体捜索等をされているので、心のケアなど必要ですか?」と、消防協会経由で打診が来たが、うちでは断った。

特異な活動を強られる田野畑村消防団

というのは、うちの分団員は遺体を見慣れている。うちの分団の担当エリアには自殺の名所の鵜ノ巣断崖という絶壁があり、団員に漁船を持っている人もいたので捜索で海に浮いた遺体を収容している。多い時には年5、6件もある。最近では海上保安部の船に渡すようにしているが、少し前までは自殺者の収容は、自分たちの船でロープで引っ張ってきて、岸壁に上げて警察が引き継いでいくという感じでやっていた。このような活動は、田野畑村消防団の中でも私の分団だけのことで、一般の人は我々団員がそのような活動をしていることすら知らないのではないかと思う。そういう時は、防災行政無線を切り替えて地元の漁協放送



平成23年8月6日時点の様子（瓦礫は撤去されている）。歌碑のみ残り、跡形もなくなったカルボナード島越駅近辺の様子

として流せるようになっていたので、「明日6時に市場前に集合」などと流すと、市場前というだけで、大体は遺体収容だと団員は分かるようになっていた。

水門閉鎖に向かった団員の1人が犠牲に

今回、うちの消防団員の1名が水門を閉めに行き、犠牲になってしまった。岩泉町が職場で、今まで職場からこちらに戻るなんてことはなかったのに、地震があまりに大きかったので家族が心配になって戻って、家族を確認してから水門を閉めに行った。その後、近くの高台に避難しに走った。丁度その時、そこに団員は2名いたのだが、1mくらい上にいた1名は助かったのに、その下にいた1名が流されてしまった。ほんの2、3歩でも上に上がってくれたら助かったかもしれない。

2、3日前にも地震があつて、津波注意報が出たので一旦水門を閉めたけれど、すぐに解除になった。それがあつたから、今回も大丈夫だという意識があつたのかもしれない。

前から言っていたのだが、水門を閉めたら団員も避難することになっていた。今回亡くなった2、3名の消防団員は、多分監視をしていたのだと思う。今までの大丈夫だったし、警察などからどれくらい波が引いたのかなどの連絡が結構来るので、今までの感覚で波の引き具合などを見るような習性がついていた。

津波が来るときに海に向かっていくわけだから、やはり水門の遠隔開閉は欲しい。ただ、故障した時どうするのか。誰が水門を手動で閉めるのか。そういう故障をしたとき、消防団員が現地に行く規則を決めておかないといけないし、行くなら管理費のことも決めてもらわないといけないし、消防団員が行くとしたら、日頃から毎回行く癖をつけておかないといけない。その辺りは県で話していても結論が出ていないのが現状だ。



三陸鉄道のトンネルと残された高架

無くなった設備の確保が急務

これまでも無線機は、1人1台というわけではないが、うちの地域で津波の避難所が10箇所くらいあって、その割り当てになっている団員には行き渡っているという状態だった。今回その無線機がなくなった。双方向の省電力タイプで、分団毎にチャンネルを切り替えて使えるトランシーバータイプがあるとよい。小型ポンプ付積載車が1台なくなってしまったので、早急に配備して欲しい。

自主防災と団員確保

うちのエリアの自治会には自主防災組織があって、婦人の消防協力隊などによる防火点検は年に2回くらい普段から連携してやっていて、住民とのコミュニケーションもよくとれている。高齢者で寝たきりの方のケアなども、自主防災組織でやっている。

一番の問題は、団員の減少だ。婦人消防の方も手が足りない。消防団員の確保は、もともとは「誰それが引退するから、後はお前が継ぐんだ」のように、伝承的に団員が引き継がれていたが、次第に若い人は入らなくなってきていた。幸い特段の理由はないが、去年あたりから20歳代ちょっとくらいの人が1、2名、世代交代みたいな感じ

で入ってきている。人口は増えていない地域なのに、定員数に1名足りないくらいでとどまっている。

昔は団員の中に漁師が多かったが、今專業の漁師は2、3名くらいで、大半がサラリーマンだ。地元ではなく村外にいる人もいるから、有事の際地元にいる団員は不足してしまう。うちの地域に漁協の団員がいて、日中はほとんど彼らが中心になってやっていたが、今回の震災で漁協職員が3名亡くなった。団員の確保は問題だし、地元にいる団員が不足することも問題だ。

余儀なくされる消防団の再編

今仮設住宅に住んでいて、違う分団の人間と一緒にいる。実際、仮設住宅は他の分団のエリアに建っている。仮設住宅で違う分団のエリアになるので、今後の活動が難しい。そこに住んでいるのに、一方の分団に招集がかかったとき、もう片方の分団は出られないとなる。出動がかかっていないのに、行って怪我したらどうなるんだというものもあるが、そこはうちの分団のところじゃない、と黙って見ているわけにもいかない。今は、前線に立たなくても後方でサポートしてもいいんだということで、そんな時は怪我しないように出動するようにやっている。上の方でも考えているとは思いますが、全分団召集して活動する方向になるのではないだろうか。今のところは、地域ごとに仮設ができているので、しょっちゅう顔を合わせたりできるし、横の繋がりを大切にやっていくしかない。

明け方まで続いた消火活動から 眠る間もなく搜索活動へ

岩手県野田村消防団

第3分団 分団長

土内 徳一郎 (59歳)

消防団歴 35年 (住職)



野田村の概要と被害状況

野田村は、岩手県の北東部、北上山地の沿岸部に位置し、東部は太平洋に面した東西11.3km、南北13.8km、総面積80.83km²、人口4,849人、世帯数1,674世帯（平成23年2月現在）の村である。第1次産業の就業者が約20%と高いのが特徴である（全国平均4.8%、岩手県13.7%）。

野田村消防団は9分団で構成され、第3分団は約300世帯、野田村の中では一番多い世帯数で、野田中学校、野田小学校という2つの学校が管轄内にある。第3分団の団員は事業主3名、公務員3名、農業や漁業を兼業で行っている会社員、土木工など、現在総勢24名である。

野田村では年に1回、村の津波警戒区域内の人たち全員参加の津波訓練が行われていた。津波のシミュレーションをもとに平成18年にハザードマップの見直しがあり、津波の浸水区域も広がり、避難所の位置が変わっていた。しかし、これほど大きな津波がくるとは想像がつかなかった。村を守る水門は、普段からの訓練通り消防団員によって閉められていたが、津波は海と水門の間に立ち並ぶ防潮林をもなぎ倒し、水門を越えて村を襲った。観測地の津波最高到達点は米田地区入口付近の37.8mにも達する。大震災による人的被害は死者38人、負傷者17人、住家被害は全壊311棟、半壊168棟、被災者は約1,500人（平成24年2月14日



十府ヶ浦の被災状況（国土地理院）

現在）で、村人のうち3～4人に1人が被災にあったことになる。避難者数は、最も多いときは912人にもものぼった。避難者が仮設住宅等に移動して、避難所内の収容者数がゼロになったのは7月4日になってからである。

会議中での地震、そして…

私は、二戸市内での会議中、一段落したときに携帯電話の緊急地震速報が鳴った。受信後直後、今回の地震を受けた。地震は前日や前々日にもあったが、その時の揺れとは比べ物にならないくらい「ドン！」ときた。大きさも凄く、長い間ローリングするように揺れ、すぐに停電になった。「これは津波が来る！」と思った。そうしたら津波のことで頭がいっぱいになり、その時点ですぐに野田村に向かった。IBC（岩手放送）のラジ



野田港と水門付近（国土地理院）

オの実況中継を聞きながら、宮古市が今どうだとか、津波の状況を把握しながら運転した。1時間ちょっとで村の近くまで戻ったが、津波が来たばかりで、まだ水がある状態で車は通れなくなっていた。山のほうはまだ積雪があり通れず、工業高校のあたりで車を乗り捨てた。車に積んであった消防団の法被を着て帽子をかぶって、車が通るところまで歩いた。たまたまその時1台の車が通りかかったので乗せてもらい地元に戻ることができた。

水門閉鎖と避難

水門は、震度4以上の地震、津波注意報が出たときには必ず出動して、水門閉鎖するようになっていた。“担当者がいないと水門を操作できない”というのでは意味がないので、担当者特定することなく、そのときに近い者が行けるようになっていたし、水門の上げ下げは団員全員ができるように訓練していた。水門の点検検査は年に3回あり、それに合せその時に集まれる団員は全員、水門の上げ下げの訓練をしていた。屯所から水門までは車で5分とかからないので、屯所に来てから積載車に乗って水門閉鎖に向かうようにルール化していた。今回の大震災時もその通り動いてくれた。部長、班長、団員の全部で4名が屯所に駆けつけ、積載車で水門閉鎖を行い、積載車で広報しながら避難していた。避難所はいくつかあるが、そのうちの一つに十府ヶ浦^{とふがうら}団地がある。水門を閉めに行った団員も含め、団員はみんな十府ヶ

浦団地に避難し、積載車もそこにあった。

水門閉鎖した団員には自営業だけでなく、会社員もいた。会社員でも、普段から「消防でこういうことがあるから」というと団員は出てきてくれるので、会社の理解もあり、それは助かった。会社に対して、消防団の活動について協力の要請とかを行っているわけではないが、小さい村で、消防団についての認識が住民に浸透しているからだと思う。

救助と消火活動

乗せてもらった車の中で、団員に連絡をとろうとしたが、携帯電話は一度も繋がらなかった。ところがその時、息子からのメールが運良く入り、私の管轄地区（十府ヶ浦）の住宅で火災が発生していることを知り、十府ヶ浦まで送ってもらった。そこに着くと多くの団員が集まりすでに消火活動をしていた。しかし、すぐに防火水槽の水が無くなり、すぐさま水源の確保にとりかかった。火災現場のすぐ脇には道があり、押し寄せられた津波が川のように流れていた。その海水をくみ上げて消火活動に使用した。また、消火活動と同時に川ようになった道には津波で押し流された車があり、その車内には母娘がいたので救助したとのことだった。

火災はポンプ車が1台しかないので鎮火するまでには至らず、津波で隣家が寄り合ったこともあ



海岸線の道路から水門を望む

って延焼してアパートを含む4軒が燃えた。第3分団の団員が17、18名、第5分団の団員もいたので総勢25～30名近くが鎮火するまで朝3時過ぎまで消火活動した。もともと第5分団は何かあれば我々の方に応援に来てもらっていたので火災現場にも入ってもらおうよう要請した。最初は浸水箇所があり、火災現場に行く道がないということだったが、山道ルートを通して入ってもらった。

翌朝から28日まで続いた搜索活動

火災現場を引き上げたが、寝るどころではなく、横になるか座るかするくらいして、多少休んで、そうこうするうち、火災現場の様子を見に行った朝5時半過ぎ、積載車に「行方不明者の搜索に入るので6時に集まれ」という無線が入ってきた。それで連絡を入れて状況を説明して「どうする？」と相談したら、火災の燻り状態が続いているのだったら、現場に少人数を置いて、あとは搜索隊に加わるように、という指示だったので、それにしたがって役場に向かった。朝6時から夕方17時ごろまで行方不明者の搜索を行った。寒い日だったがそういうことを感じる状態ではなかった。亡くなった方を見つけたら、一旦、工業高校の体育館に安置することになり、役場の軽自動車を使ってご遺体をその日に2体か3体運んだ。警察は、どのような状況で亡くなっていたかを全部調べる必要があるので、消防団で「誰が、どこで、どのような状況で見つけた」ということを書いて出すようにした。震災翌日に警察は入ったが、一緒に搜索に入る状況ではなく、2、3日してから、ご遺体が見つかったらそこに行って検証する、という体制になった。搜索は行方不明者全員が見つかるまで、3月28日まで続いた。

搜索活動は1日～3日までは朝6、7時ごろから開始した。4日くらいたって役場が手配した重機が入り、道路の復旧を行いそれが一段落した後からは8時に集合して、終わりは暗くなる概ね夕方5時ごろまで行った。緊急消防援助隊が入った



手動式の水門開閉装置。ハンドルを回すことで水門を上げ下げする。

ので、地元の消防はそれに従い、自衛隊に場所を案内するなどの活動も行った。自衛隊も緊急消防援助隊も2日目くらいには入ったが、搜索現場で活動していたのでどの位の人たちが入ったかは全くわからなかった。消防団員たちは「担当地区の搜索をしたい」という要望はあったが、それどころではなく、村全体としてどう動くか、全体としてどのようなことをするかというのが重要であった。全体の指揮はすべて対策本部が体制をとり、村、緊急消防援助隊、自衛隊、消防団も入って毎日会議をして、当日の活動内容を決めてから活動するようにした。搜索は本当に手探りで、1週間から10日くらいして、疲れがたまっていることに気づくような状態だった。グループを作って交代制にするなどの余裕もなく、消防団員総出で活動した。被災していない団員も屯所に泊まり、一緒になって寝食を共にしたので、メンタル的にはそのことがよかったようだ。団員の家族は、避難所や親戚宅にという者が多く、何日も連続して活動した。1週間くらいたってからだったと思うが「仕事に何日か出てくる」とか「1日いっぱい働くのではなく、休み時間をもらえるのだったら自分のところに行きたい」、「全体活動で車の誘導をするより、自分たちのところの手伝いをしたい」という希望者が出るようになった。公と個人の葛藤が生じている団員の気持ちも分かるので、適宜対応するようにした。自分の家の片付けの時間をとることで気持ちが治まる団員もいたので、それでよかったと思う。



水門の上から海岸を望む。防潮林がなぎ倒されている。



再生が求められる防潮林

連絡手段の見直しが課題

電気は停まり、3月19日に復旧するまで、東北電力が発電車を持ってきて設置した何箇所かだけは電気が通ったが、それ以外のところでは停電状態だったので、発電機の不足を感じた。

また、水回りについては、上水が復旧して水道が通っても、下水が使えないという、生殺しのような状態が続いた。水が出ないなら、あきらめもつくが…。トイレも困った。10日くらいたって仮設トイレが入ったが、それまでが大変だった。いつ復旧したかは全然記憶にないが、記録をみると、上水が3月30日に概ね復旧、下水は地区ごとに段階的に、玉川3月16日、新山3月24日、城内4月2日、下安家4月4日となっているが、取材時（平成23年8月7日）においても仮復旧状態だ。

風呂については、避難所に逃れた人たちは、国民宿舎とかに運んでもらって入ることができたようだが、家が流されず避難していない人たちは、下水が使えないことで何日も入れず、かえって不自由していた。

携帯電話は、中継所が流れバッテリーがだめになったとかで、米田地区では震災直後はもちろん、夏前まで通じなかった。通じても10日前のメールが届くようなこともあった。

通常の連絡は連絡網によって、分団長→部長→班長→団員という流れで、すべて携帯電話で行う

ことになっていた。今後は携帯電話が使えなかった時の連絡手段が大きな課題だ。

図上演習なども取り入れたい

これまでは、出初め式とか訓練とか、何かきっかけがあるときに屯所に集まっていたが、津波後は「集まらなきゃだめじゃないか」ということになって屯所に集まる回数が増えた。幹部会も3回開き、行事の際の警戒とか、どのような事故が発生したら、どのように対処するかとかについて、これまで以上に話すようになった。図上演習など机上シミュレーションは今まで行ってなかったが、今後は加えていくことも必要だと思う。

分団活動に若い団員が少なくなっているのはどこも同じ傾向だが、このあたりは出稼ぎも多い地域で、その出稼ぎの形態が変わってしまったことも団員確保に影響している。昔のように出稼ぎに行っても常に帰ってくるというスタイルではなく、盆と正月しか帰らなくなってしまったからだ。長期間、家を空けると消防団に出る機会が限られてしまうので参加できない、となってしまう。歳をとって村に落ち着く人もいるかもしれないが、若い人を入れていかなければならない。若い人は村に定着しなくなっているから、何か知恵を出して、若い人も加わってもらえるようにしながら、意義ある分団活動を推進していきたい。

震災当日夜にも 大きな津波が来襲

岩手県野田村消防団
第4分団 分団長

橋場 敏光 (56歳)
消防団歴 35年 (漁師)



地元で車を運転中に地震に遭遇

野田村消防団第4分団は沿岸から内陸までをカバーしていて、第1部（津波避難区域世帯少数）、第2部（全体的に津波避難区域）、第3部（高台）と分かれている。

3月11日、私は早朝3時にワカメ取りに出て、戻って塩蔵作業し、材料を買いにホームセンターに車で向かっている途中で地震にあった。携帯電話の緊急地震速報が入ったが、そのまま少し走ったが、とても走れる状態ではなく、車を停めて地震が収まるまで車で待機した。自宅から8kmくらい来たところだったが、そこからUターンして10分くらいで自宅まで戻り、電話で水門閉鎖の指示をして、半纏を持って海に向かった。

海に向かって2～3分車で行ったところで「停電で水門が閉められない！」という電話が入った。大津波警報が鳴ったから「とにかく手で閉めろ！」と指示して電話を切り、他の団員と合流して、海に行き避難誘導する人と小型自動ポンプ付積載車（以下、積載車）に乗って広報する人々に手分けをするように指示した。

サイレンを鳴らしながら1軒ずつ避難指示

海上の養殖施設に船が1隻見えた。その人は携

帯電話も所持していない人で、積載車を海に近い高台につけて、その船に向けてサイレンをしばらく鳴らし続けた。あとから聞いたら、そのサイレンには全く気づかなかったという。その人は運良く、作業が終わって第1波と一緒に帰ってきた。船が岸壁についたとき、波で海面が岸壁の高さまで上がっていて、自分の足で簡単に降りられるような状態だったという。

私は、15時を少し過ぎた頃から、自分の軽トラックで、2部の避難所のえぼし荘に避難するように1軒ずつ叫びながら広報しながら走った。高台に残した積載車が「連絡がつかなかった」と戻ってきて合流したので、積載車でサイレンを鳴らしながら広報し、積載車から2名降ろして1軒ずつ戸別訪問して避難指示をして回らせた。住民の大半は車でえぼし荘に向かった。

私は再び海に向かって車を走らせ、積載車も続いた。私が海に向かうのは3回目ということになる。すると、防波堤に第2波の波しぶきが上がる



野田村を襲った津波（防潮堤を越える前）

のが見えた。三陸鉄道の陸橋くらいまで、もの凄く高い波しぶきだった。あとで調べたら、海岸から500m～600mくらいのところで第2波に気づいたことになる。

津波の第2波から間一髪で避難

積載車は広報しながら住戸の方を見ていたので波を見ていなかった。向きを変える時間がないと思って、私は車を道路に止め、ドアを開けて積載車の団員も降ろし、波を見ながら山に向けて全員逃げた。積載車の後ろにも車がいたので、津波が来ることを知らせると、その車はバックしながら逃げた。最後は車を置いて避難所までたどり着き、助かったことが後でわかった。

自分の軽トラックが積載車に当たって、積載車が浮いて流されるのを見た。山の麓まで50mくらい走ったときに津波に追いつかれ、足元まで水が来た。その時は無我夢中で分からなかったが、お尻が濡れる寸前のところを津波が通っていった。気づいたら、山に爪をたてたまの格好だった。

積載車の団員たちは、なんぼ叫んでも声もなかった。団員たちと逃げた方向が違って、離ればなれになっていた。我に返って団員たちを探しに行くと、女性1名がロープにつかまっており、そこの木につかまって震えている団員2名もいた。

その場所から200mくらい上流まで家があるので、残っている人がいないか確認しに行こうと団員に声をかけたが、2名とも木につかまったまま



野田村を襲った津波（防潮堤を超えた後）

動かない。それで、私1人で「大丈夫か！大丈夫か！」と叫びながら走って、上流方向の最後の家まで行って、また確認しながら団員がいる木のところまで戻った。

それからは、団員と私の3名で、「誰か残っていないか！」「誰かいたか！」と声をかけながら、壊れた家を1軒ずつ下流に下りながら国道まで歩いていった。

国道に行く途中に鮭の孵化場があって、その職員全員が反対側の高台に逃げて無事だったことが分かった。歩行困難な人が残っている家があって、団員がおぶって乗用車に乗せえぼし荘まで運んだ。それから高台に避難している人たちも、積載車（6人乗り）で数回往復しながらえぼし荘まで運んだ。

分署にいた団員や応援に来てくれた第3部の団員がいて、第3部の積載車でえぼし荘に行って、誰がいたか確認するよう責任者に指示した。第2部では責任者は自主防災組織で、誰が何戸の持ち分というように、あらかじめ6班に分け、その責任者は決めてあった。

1回目に指示して、2回目にえぼし荘に行ったときに、確認できない人を把握して、よその地区に行っている人は仕方がないから、その地区にいる人を優先的に確認するようにした。全員の安否確認ができたのは震災から3日目だった。

守れなかった鮭の稚魚

鮭の孵化場施設が停電のため、発電機を動かしていた。あと4時間くらいで油がなくなる。このままでは稚魚がダメになるので、灯油を消防団で運んでもらいたいと要請され、そちらに5、6名回した。自分たちで、津波が行かなかった家の食料を持ち出して19時頃食べながら動いた。

油を運ぶため、道路が通れるように瓦礫をどかしはじめた。5、6時間動きっぱなしだったので、1度休憩しようと、皆1箇所に集まって温かいコーヒーを飲んだりしながら休んだ。また道路

を片付けに行ったら、なんとまた瓦礫がさっき以上に道路に積んであった。

「こりゃおっかねえ、いつ次どんなのが来るかわからないからここにいられない。高台に行こう」と思った。そして孵化場の職員たちにも状況を説明して「やめる」と伝えた。彼らも「じゃ、あきらめましょう」となった。自力で泳げる鮭ではなかったが、川に放流するということで水路を開けて流した。

後から思っても、道路を直すなど、孵化場へ行くために団員を動かしたが、そのタイミングがずれていたら…。暗くて波が来たのも見えなかったし、停電だし、防災行政無線も全く聞こえなかった。もともと私の住んでいる地区は防災行政無線がなかなか届かない場所で、本部では聞こえるが出勤した場所によっては聞こえないような所だった。

夜間に来襲した大きな津波の爪痕

次の日、明るくなって行ってみると、第2波よりも大きい波が来たのが実際に確認できた。私は第2波の後、我に返ったときに自分の家を見ている。シャッターの下30cmくらいがバラバラになっていて、戸が壊れ、上のガラスが残っていたことなどを確認して戻っている。ところが、シャッターは全部なくなり、柱もなくなって、屋根だけが残っている状態だった。

自分のいた場所で、暗くなって、21時や22時になって第2波より大きい波が本当に来ている。私の話を他でも、別の場所ではいつの波が大きいのか、話が全然合わない。でも、2か月くらい経ってから、テレビを見て、20時くらいに第2波と同じくらいの規模の津波が来たというのを宮城県の人が言っていた。

実際にどのような津波が来たのか見てはいないが、第2波で川沿いにあった孵化場のコンクリート施設が倒壊しているなど障害物がなくなってから津波が来たから、波の通りが良くなって波が一気に上流まで進んだのかなと思う。

行方不明の漁協船長の搜索活動

震災翌日、団本部に行って、情報交換をしたり指示を仰いだりした。その時、団本部の被害が大きいので、本部に詰めるよう要請があった。私の判断で、「こっちに応援に来られる状態でないし、自分の方でもまだ確認とれていない人がいるので調べさせてもらいたい」と言って帰った。

安否がとれない人の中に、野田村漁協の船長をしている人がいた。船長は、「地震の時は船長だから船を沖に出さないといけない」と言って漁協に向かったが、漁協は「この状況で船はもう出せないなのでお帰りください」と伝えた。その晩、消防や船長の家族、地区の役員が協議して、明日搜索態勢をとってもらいたいということになった。

私は本部に「明日は、まだ地元の不明者を捜したいから、本部とは別行動にさせてください」と頼みに行った。「明日の指示は、また明日行方から、分団長はまた集合してください」と言われ、それで翌朝行って「今日、当分団は搜索をします」と許可をもらって帰った。

13日朝、避難所で朝食後、団員だけでなく地域の泳げる男性にも何人かずつ入ってもらって3班に分けて搜索に入った。搜索開始から1時間もしない頃、船長の車を南浜の国道の山寄りで見つけた。携帯電話で全員集合させ、車近辺を午前中搜索したが見つからなかった。携帯電話は各自が持っていて、運がよいと誰かの携帯電話が繋がるといった状態だった。

避難所で昼食をとって、午後から搜索を再開した。15時過ぎに、車から10mくらい離れたところで船長を発見した。その時、津波注意報か警報が入って、皆避難しないといけなくなった。

ちょうどカラスが来て遺体から離れなくなった。呼んでも警察は来ないし、本部に無線を入れても「警報が出たから、迎えに行けない」というので、私が遺体の所に残って、毛布を掛けてつきっきりで守った。警報解除後、警察が来て、遺体を警察に引き渡した。

不審者を警戒しての夜の巡回

4日目以降は、家の壊れていない人も全員えぼし荘に避難していた。まだ電気も通っておらず、真っ暗だった。そのうち、今度は泥棒の話が出てきたので、消防団で夜巡回して欲しいと要望が出てきた。

私、部長、班長の3名で3、4時間おきくらいに、第3部の積載車で行ける範囲で地区の巡回を始めた。他の団員に声をかけたかったが、捜索などで疲れているところを、夜行かせられなかった。

一晩に3、4回、直接不審者に遭ったこともある。地元の人ではなかった。宮城県ナンバーの軽トラックが来て、車から降りて家の前に立っているところに行き当たった。質問すると、夜なのに「被害状況を見ていた」と言う。軽トラックに物がいっぱいあって、シートがかけてあった。「中を見せてくれ」とも言えなかったので、「最近盗難事件があって巡回しているので、この地区に入らないでくれ。国道へ行ってこの地区から出てくれ」と言って、その車の後を地区から出ていくまで付いていった。

日中も不審者らしい人がかなり来ていた。これでは消防団の手に負えないので、警察に頼んだ。他県からも警察の応援隊が来て、パトカーで夜巡回するようになってから、安心することができた。

指示を仰ぐ前に動ける体制も必要

本部が作成したマニュアルがあったが、今回その中に書かれていない、全く想定しないことが多かった。マニュアルに頼っていたら全く動けないことがわかった。津波なら震度4以上は自主的に動くとか、〇〇分団の火災なら自主的に応援に行かなければならないとかあるが、その中に、本部、団長の指示を仰げと書いてあるので、連絡がとれなくなればどうしようもない。今まで指示を仰がないで行動をとった時、何かあったらその



津波の爪痕が残る護岸

責任は誰がとるといのがあったが、その問題をはっきりさせないといけない。

私も含めて、本部の指示を仰ぐ、分団長の指示を仰ぐという流れでやってきたが、今回思ったのは、指示を仰ぐ以前に、動けるような体制を作っておかないといけないということだ。いつもなら携帯電話で簡単に連絡とれると思っていたが、今回のように何も通じなければ、指示を仰いで待っては何もできない。自分の判断で動けるように幅を持たせてもらわねばならない。それについて、責任は分団長がとるといようなことが必要だと思う。

必要とされる心のケア

避難所にいる人の名簿と団員の名簿を心のケアの医療チームに渡したので、その方々が巡回している。うちにも週1回訪ねてくる。団員の心のケアは必要だ。若い団員が捜索していて遺体を発見したりすると、ごはん食べるのも辛そうだったり、次の日も元気がなかったりする。

自分は長年やっているから、色々な経験があって、それ程のショックもなかったが、大変な思いをした団員もいる。

「私はこの頃、津波の話をする時涙もろくなって、今まで気丈で絶対人前で涙を見せたことがなかったのに、家で家族と話していても、津波の話をする時自然と涙が出てくる」と相談を受けた人もいるが、週1回先生のケアを受けて、今はだいぶ良くなった。

「皆さんから感謝されると 良かったなって思いますね」

岩手県宮古市消防団
第22分団 分団長

佐々木 積 (60歳)
消防団歴 30年 (会社員)



宮古市の概要と被害状況

宮古市は、岩手県の沿岸部ほぼ中央に位置し、東に太平洋を西に北上山地、さらに市の西部は県都盛岡市と隣接している。総面積1,259.89km²と人口6万1,006人（平成21年10月1日現在）の第一次産業を主産業とする市である。アワビやワカメなどの水産物漁獲量（平成18年度実績）は、全国1位を誇っている。長大な防潮堤があり、津波防災都市宣言で有名な旧田老町は、宮古市にある。宮古市の消防団は、45分団定員1,590名（平成22年4月現在1,224名）が所属していた。

3月11日14時46分の大地震では、市内茂市で震度5強を田老で震度5弱を観測した。津波は、14時48分に20cmの第1波が観測され、その後最大で8.5m以上の津波が15時26分に観測されている。市は、揺れと同時に災害対策本部を設置し、大津波の津波警報を受けて、14時49分に避難指示を発令している。津波の遡上高さは、観測史上最大の40.4mであったことが全国の研究者らの合同調査グループ調査で判明している。

津波は、市街地や田老地区の防潮堤を越え、破壊し多大な被害を生じさせている。

人的被害は、死者420人、行方不明者107人、負傷者33人である。住家被害は、全壊3,669棟、半壊1,006棟であった。

この津波による消防団の人的被害は、平成24年

3月2日時点で死者16人、行方不明者1人、物的被害は、全壊の屯所6箇所、半壊が5箇所被災車両台数は7台にも上った。

宮古市消防団第22分団について

消防団に入って31年になります。きっかけは分団長から人が足りないから入ってくれと言われてです。仕事は金属プレス関係の会社に勤めています。

第22分団は27名います。機能別団員は3名。分団長1名、副分団長1名、部長2名と、班長6名、あとは団員です。22、23歳から65歳くらいまでいます。担当エリアには350世帯が住んでいました。消防団員の人数は足りていたと思います。

消防装備はポンプ車が1台、小型ポンプが1台



消防団員が開めた水門

ありました。無線はポンプ車に、アナログとデジタルのものがああります。それぞれに子機が付いているので、無線の子機を分団長から部長まで、それと班長の何人かが持つようにして、分団内で連絡が取れるようにしています。

管内には大きな水門が5つ

消防団の活動は火災、津波の対応、あとは大雨が主なものになります。火災の場合は近くの3、4つの分団が合同で対応しています。火災が起きると消防本部から何分団と何分団は出てくださって連絡が来ます。

大雨の時は消防署から私に連絡が来て、私から他の分団員に連絡して活動を開始します。もう一つが警報が出たら屯所に集合することになっています。

津波の時は、注意報が出たら屯所に集まることにしています。水門は大きいのが5つ、あとフラップゲートがありました。注意報などが出た場合は5つの水門を閉鎖することになっていました。電動が1つ、手動が1つ、後は扉を押すタイプが3つありました。

チリ地震津波の時はすべて閉鎖しました。水門を閉める人は決まっています、水門を閉めてから屯所に集まることにしていました。昼間は仕事で多くの団員が地区におらず、機能別団員の3名と浜仕事をしている人の4名しか地区にいません。昼



消防団員が閉めた水門

間に人がいないので、機能別団員として3名に入ってもらって水門を閉めてもらっていました。

水門は管理を委託されているので、普段は点検や掃除もしていました。

揺れと同時に始まった消防活動

地震発生時は仕事で、津軽石から車で10分ほど先にある勤務先にいました。大きい揺れと同時に津軽石の方へ戻りました。揺れが大きかったので、これはやばい、確実に津波が来ると思いました。

半纏とヘルメットはいつも車に積んでいるので、すぐ消防活動に入りました。無線で呼びかけでも誰も出ないので、もう他の団員は出ているのだなと思いました。屯所のシャッターは防犯の為、開けると携帯電話に連絡が来るようにしていました。シャッターが開いたことを知らせる音が鳴らなかったのも、まだポンプ車は誰も乗っていないと思いポンプ車を取りに行きました。仕事場から屯所までは10分くらいで着きました。

ポンプ車に乗って防潮堤の方へ行くと、すでに他の団員がいました。防潮堤はもう閉めて、残っているのは土谷川の水門だけという事でした。土谷川の水門は、第20分団から遠隔で操作できる水門で、災害時は第20分団に遠隔操作をお願いしているんですが、今回は団員が直接閉めに行きました。遠隔操作は上手くいく時といかない時があるので、今回は我々の方で行きました。

停電していたので電動で操作できませんでしたが、自重効果で、電源が落ちて閉められるようになっていました。しかし地震の影響で水門が途中で止まってしまったそうです。それで水門が閉まらないという連絡が無線が来て、閉まらないなら帰れと言っていたんですが、たまたま大きい揺れが来て、水門が閉まりました。

その時、地区内には団員が7、8名いたので、水門を全部閉め終わるまで15分から20分くらいだったと思います。水門を閉め終わった後、普

通なら高台に上って津波が来るか見ているんですが、今回は閉め終わった後、ポンプ車で広報をして回ったんですよ、「逃げてください」と。そうしている内に津波が来たので、高台へと避難しました。

団員で犠牲になった人はいませんでした。ただ、危なかった団員が1名だけいて、波と競争して高台まで逃げたそうです。大きい津波が来る場合は、水門を閉める際に車を水門の内側に駐車するように言っていたのですが、海側に駐車していたようです。

効果のあった津波ワークショップ

地区の住民で犠牲になった人は25人いました。津波なんて大したことないと思った人がやられているのです。今まで大津波警報が出た時に、実際は大したことなかったが多かったからかもしれません。子どもとお母さんで流された人がいて、子どもは逃げようって言ったんだけど、お母さんは大したことはないから大丈夫だと言って逃げなかった。それで津波が来て、2人は2階に避難したけど、流されてしまって。子どもは助かったけど、お母さんは亡くなったということもありました。後は一度逃げたけど、物を取りに戻って巻き込まれた人もいました。逃げなかった人、一旦は逃げたけど、大丈夫だろうと思って戻った人がやられているのです。

ただ、全体的にはうまく逃げれたと思います。赤前、津軽石では偶然、津波が来る1日か2日前に、津波のワークショップをやっていました。市の方からの声掛けで、専門家が来てやっていました。津波が来たらかう逃げましょう、こうしましょうとか。その効果はあったと思います。

津波の直後に始まった救出活動

津波が来てから、消防団員は屯所にいました。



大津波が防潮堤を乗り越える瞬間
(岩手県消防協会提供)

10名くらい屯所に居たと思います。津波が取まってからは、15、16名で瓦礫の中や家の中にいる人の救助、救護活動を行いました。まだ明るかったから、16時過ぎ頃からだったと思います。

屯所の近くの民家に、寝たきりの人がいて奥さんが付き添っていました。家の中から声がしたので、波が来てないのを確認しながら、家の中に入って助け出しました。水はある程度、引いていて、入るには大丈夫だと思い救助しました。救助した人は一旦、屯所に保護して、後は無線で救急車を頼みました。救急車は山を回って津軽石の方から、時間はかかったけど来ました。

その他にも、何mか離れた所に、冠水した水の中で、物に掴まって浮いている女性が助けを呼んでいたんです。我々としては津波の危険もあり、ボートも何もなくて、瓦礫が水の中で動いている状態でもあり、何とも出来なくて非常に困りました。消防署の方に船を借りたくて連絡したのですが、ないとのことでした。そうしたら、団員の一人のお袋さんだったらしくて。気が付いて泳いでいったのです。それで何とか助けることができました。その団員も、揺れが来てすぐ消防活動に入ったから、お袋は逃げていると思っていたのです。だけど、着ている服が、お袋に似ているってことで、入っていったそうです。消防団員が、住民を救ったというのは、相当あったと思います。

暗くなるまで救助救護活動を行って、その後は学校に行きました。学校では先生や近所の方が居て、避難した人の世話をしていました。あとは道

路が瓦礫で使えないので、少しでも広くしようと思って、瓦礫をどかしたりしていました。

4月になっても続いた搜索活動

その日から、家をなくした団員は屯所に寝泊まりしていて、私も付き添って一緒に屯所で寝泊まりしていました。屯所で起きたら飯を学校で貰って、その後は、瓦礫の撤去や生存者の搜索、遺体の搜索をするという生活をしていました。自衛隊が結構早く来たので、一緒に活動をしていました。

搜索活動は4月になってもしていました。仕事の方は、仕事場が津波で被災していない地域にあって電気が回復してから業務を再開しました。ただ、会社から15時になったら帰って良いと許可を貰っていたので、ずっと消防活動をやっていました。うちの会社は消防団活動に理解があって、認めてくれるものですから。

津波被害への対策装備や正しい情報

津波のことを考えるとライフジャケットや小型のボートが必要だと感じました。あと、無線機もデジタル式とアナログ式を併用して使っていますが、地形上山間部が多いために、デジタル式も中継塔を介しており、当日電源の遮断で電波が届かず、使用できない状態が続き、電源復旧までの間使用できませんでした。そのためにアナログ式を使用しました。

津波の正確な情報が知りたかったですね。3月11日の後にも何mとかの警報がありました。流されて間もない時期に生存者の搜索をしていたら警報が出て、何mだとか言われると、行きたいんだけど、搜索が出来なくなるんですよ。だけど、山田や陸前高田の方で5mの警報が出たからって団員に海面を見てもらっても、全然穏やかなんですよ、何でそんな話がでるのかなって。後で聞い

たら誤報だって話もありましたけどね。

あと、津波から町を防ぐ防潮堤だけじゃなく、波を上手く逃がすような仕組みが必要だと思いません。

伝えたいこと、それは「命」

やっぱり命ですよ。水門を閉めることも大事だけど、危なかったら早めに高台に逃げるようにして欲しい。財産よりも命です。あれが大事だこれが大事だって、死んだら終わりです。

正直言って、やばい時に分団長になったかなって思いました。ただ、確かに今回のように、皆さんから感謝されると良かったなって思いますね。寝ないで頑張ったのが認めてもらったのかなって。

水門閉鎖後、間一髪で避難

岩手県宮古市消防団
第32分団 分団長

佐々木 照夫 (53歳)
消防団歴 26年 (建設業)



平日昼間に地元にいる団員が少ない

私は、宮古市田老上撰待地区に住み始めて32年目になります。生まれは松尾鉱山のある岩手県松尾村です。実家の兄が地元の消防団で活動していたので子どものころから法被姿は見ていました。息子3人のうち2人は、盛岡と宮古市の消防本部で消防職員として勤務しています。

消防団には、25歳で入団しました。入団のきっかけは、地区内の先輩団員の退団でした。以前から退団する団員は、法被を引き継ぐ代わりに団員を見つけるのが、消防活動を維持する地域のルールみたいなものであったのです。

今も基本はそうですが、地元若者がいなくなったり、いても断られたりして、新しい人が入って来ない。当時の消防団は、若い人たちが地元の人と交流する良い場でした。さらに若い人も居たので団員の更新も早く、20年経って50歳で引退もありました。今では消防団歴30年以上の消防団員も多いのが実態です。消防団活動によって地元との繋がりが出来たことや、消防活動自体が地域とのコミュニティ醸成に役立ったと思います。

第32分団の団員数は、震災前で29名でした。このうち60歳以上の機能別団員が4名で農業や漁業を営んでいて地元の撰待地区にいる団員は、2、3名で他は田老や宮古市に勤務先がある団員が殆

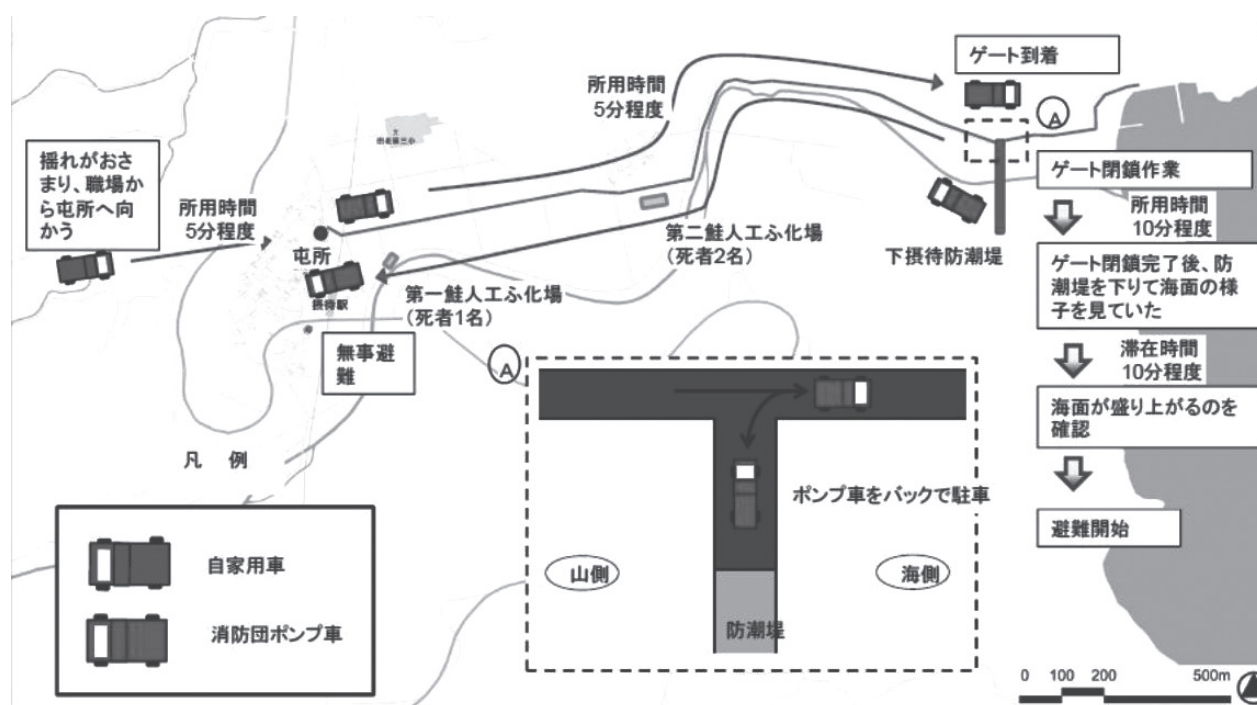
どでした。つまり平日の昼間に直ぐ消防活動に移行できる団員が、非常に限られることが課題であったと思います。分団の全員で活動するのは、操法訓練・消防大演習・防火訓練等が多いため多くは年間50回の出勤があります。

工事現場で大地震に遭遇、そして地元へ走る

3月11日14時46分、宮古駅近くの工事現場で脚立に上がって作業中に地震に遭遇しました。3分近くの大きな揺れの中で足場に掴まりながらも身を守ることに専念しました。揺れ始めの大きさでこれはただ事ではないと分かったので、津波が来ると直ぐに思いました。

仕事場には異なる消防団に所属する仲間が3名いたので「これは駄目だな。みんな行くべ」と近くの駐車場に止めていた車に銘々が飛び乗ってそのまま地元へ突っ走ったのです。車に乗る直前に防災行政無線による「津波に注意してください。高台に避難してください。」という放送は聞いたと思います。

移動中の車内でつけっぱなしのカーラジオから津波に関する情報は聞いたような記憶はあるのですが、気持ちは屯所や地元が気になり放送された内容は覚えていません。自家用車に乗っている場合でも消防団活動の場合は、半纏を羽織ることで活動中であることを示しています。あのときも



第32分団の水門操作活動と避難（松尾一郎氏提供）

自家用車に積んでいる半纏を羽織りました。分団長だから早く摂待地区に戻りたいけど、前に行く車が遅くて道を譲ってくれない。緊急車両であるって示せる何かがあればいいとその時に思いました。無事に田老地区を通過して下摂待地区に着いたのは15時20分過ぎだったと思います。

すでに津波の第1波は、来ていました。仕事場からおおよそ30分くらいかかりました。偶然ですが私の車の後ろを走っていたのが副分団長でした。国道45号を走ってきたけど仕事場を出るのがもう少し遅かったら田老地区で津波に遮られていたか、あるいは津波に車ごと巻き込まれていたと思います。本当に間一髪でした。下摂待地区に着いたときは、津波が襲って家も何もなかったのです。

水門閉鎖後間一髪で避難

私や副分団長が自家用車で地元に向かって走っている最中、地元にいる消防団員の消防活動は決死の行動でした。消防団の行動規範では、地元にいる団員が水門を閉鎖することになっていまし

た。この日も地元のリンゴ農園で仕事中の団員は、揺れが収まると同時に屯所に向かいました。屯所で地元にいる団員3名と合流し、1名を屯所に残し3名で消防ポンプ車に乗って下摂待の水門に向かいました。下摂待の水門は、図にあるように摂待川の河口部にあって高潮や津波情報が発表された場合、必ず水門を全閉操作する取り決めでした。閉鎖操作は、屯所の横にある操作室（水門から1kmは離れている）から無線で遠隔操作するようにしていましたが、その日は、発電機が立ち上がらなくて遠隔操作ができませんでした。

そのため集まった団員でポンプ車に飛び乗って水門に向かうことになったのです。途中で自家用車に乗って駆けつけた3名の団員と一緒に6名でゲートを手動で閉めました。水門にも発電機があったのですが、立ち上がりませんでした。

操作後に海面を見ていた団員らは高い津波を確認して、慌てて車に飛び乗って津波に追われるように屯所まで命からがら逃げ戻りました。いつも訓練の時は、車を海側に向けて駐車するのに、今回は、車の後部を海側に向けた状態で駐車していました。車に乗って走り出した瞬間に海を見たら津波が水門を覆い被さるように見えたので、出る

のが数秒遅れていたら巻き込まれていたかもしれません。さらに水門があったおかげで逃げる時間が出来たようです。6名の団員は、屯所に戻ったところで宮古から駆けつけたばかりの自分らと合流することができました。

津波襲来後の救助活動が始まる

津波襲来の後に屯所に集合した団員は、総勢10名でした。摂待地区で津波被害が激しかったのは、下摂待地区です。ここでは、全世帯が全半壊状態で3人の犠牲者を出しています。津波が去った後も下摂待地区は、浸水によって孤立していたため、消防団は山道を使って救助活動を行っています。消防団に支給されている無線は、消防ポンプ車の車載無線と携帯無線機1台しか無かったので、山道伝いに孤立集落に入る団員に携帯無線機を持たせてさらに見通せる場所まで他の団員が消防ポンプ車を移動させ交信しました。被災した下摂待地区の避難所に避難している住民と合流した団員は、住民の要望を聞いて、いったん屯所に戻って、それから私は、要望のあった毛布、ストーブさらに灯油を6名の団員に持たせ、下摂待地区の避難所に支援物資の搬送をさせました。その日の夜までに、集まった団員は22名でした。

21時過ぎに隣の田老地区で山林火災が発生したとの通報を受けて、その消火支援のため団員を7名ずつのチームに分けて消火活動に当たらせました。

森林火災は翌日の明け方には鎮火しました。地区内は津波によって持ち運ばれた瓦礫が多数あったため集落内の道路を使えるように瓦礫除去を消防団で実施しました。道路が使えるようになったこともあって下摂待地区の孤立した避難者を移動させたり遺体捜索・搬送が出来るようになったのです。

その後 消防活動は長期におよび、消防団としての活動が終了し日常に戻れたのは5月末でした。

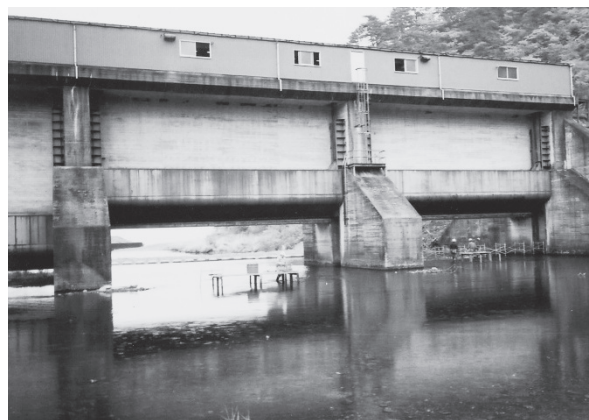
携帯電話への依存度が高すぎた

第32分団の震災前の消防装備は、市等から支給された装備や団の経費で購入したものも含めた主なものは、消防ポンプ車1台、小型ポンプ積載車1台、小型ポンプ4台、固定無線2台（ポンプ車、積載車）、携帯無線機1台、小型トランシーバ4台（団で購入）、ヘッドライト10台（団で購入）でした。

今回の震災対応で消防装備の課題は、通信手段にありました。停電や揺れ等による通信施設被害もあって携帯電話がまったく使えませんでした。これまでの活動や訓練時の連絡手段は、携帯電話に依存していたのです。専用の消防無線は、ポンプ車に固定している1台と携帯無線機が1台のみでした。現地で活動を行っている団員と連絡を取る手段もありませんでした。自前で用意した小型トランシーバがありましたが、このトランシーバも小出力タイプであったため到達距離が短いなどの制約があったのです。

つまり災害時に危険な地域で活動する消防団にとって連絡通信手段がないことは致命傷であり、全分団員が確実な連絡ツールを装備することは重要と考えています。

そして必要な消防装備として、夜間作業中や瓦礫の中を捜索した際に、作業中に釘を踏んでケガした団員もいました。団員の安全確保を考えると、照明装置や安全靴は必須と考えます。



被災前の下摂待水門（宮古市消防団第32分団提供）



被災後の下摂待水門

命を守る。そのために情報ツールを

一連の消防活動を通じて団員の生命を守るために必要なことを幾つか述べたいと思います。

●団員の命を守る

分団長の立場は、団員が災害の巻き添えにならないようにすることにもあります。今回も6名の団員が、下摂待水門の操作に関わり津波に巻き込まれそうになりました。揺れや停電で遠隔操作が出来なかったことが原因で、危険な目に遭遇したのです。いかなる場合も安全な場所から確実に遠隔操作できるようにすることが重要です。

また仕事場が地区内にあって、消防活動に移動する途中で津波に巻き込まれた団員が1名いました。亡くなった団員は、私と同じ年に入団した仲間です。その日の夕刻にその団員の両親にぎりめしをもって屯所に来ました、息子がいないことが分かって「あー、じゃあ駄目かな」って涙を堪えながら帰られました。私たちは、泣けませんでした。本当に泣けたのはすべてが終わってからでした。

●津波情報があまねく伝わるようにする

消防団員は、まったく情報がない中で消防活動を行っていました。特に現場は、ポンプ車のサイレンやエンジン音があって活動中は周囲の音が聞こえません。「そのような環境下であっても団員

内で情報を共有できるようなものがあると良い」と考えます。

分団長として大震災の災害対応活動を経て

まさか自分が分団長の時に、大震災が起こると思わなかったです。自分が生きていうちに、ましてや津波の関係のない内陸の地から来た自分自身が大津波に遭遇するとは考えもしませんでした。それと震災の後に、「分団長さんありがとうございました」って言われるけど、実際、すべて私がやったのではない。分団員が頑張ってくれたのだと言っています。消防団は分団員が頑張っているからあるのです。遺体捜索も全員見つかってよかったと思います。見つかってなかったら、復旧も復興も無いと思います。自分も勉強になったし、地域の若い人たちも、普段は協力的じゃない人もこういう時は来てくれるので、やっぱりそういう気持があるのだと判ったし、やって良かったと思います。それとこれからの消防団員にも、あるいは若い人に対しても、こういう事もあるのだって事を、やっぱりこの災害を忘れないように伝えていかなければならないと思っています。避難訓練や防災対策についてみんなの意識がちょっと高まったと思っています。それを持続していかなければいけないって考えているのです。



宮古市役所周辺の浸水状況

3日3晩・不眠不休で 住民の避難支援と消火活動

岩手県山田町消防団

第2分団 分団長

糠盛 祐一 (47歳)

消防団歴 26年 (漁業)



山田町の概要と被害状況

山田町は、岩手県沿岸部陸中海岸のほぼ中央に位置し、北部は宮古市、南部は大槌町、西部は宮古市と接し、東部は太平洋に面している。町の総面積は263.45km²で、平地部は極めて少なく面積の大半は、山林原野が占めている。また推計人口は1万6,831人(平成23年11月現在)となっている。本町の中心的産業は、リアス式海岸を利用した養殖を中心とする漁業であるが、山間部を中心に中小工場も稼働している。

山田町の消防団は13分団から構成され、第2分団は田の浜地区を管轄区域とする24名の団員で組織されている。

大震災によって山田町では、震度5弱の揺れを観測している。その3分後の14時49分、大津波の津波警報が気象庁から発表され、同町では防災行政無線により避難の呼び掛けを行った。また山田消防署では消防車両を安全な場所に移動するとともに、広報車で住民への警戒広報活動を行った。その後地震による津波は、同町沿岸部の約4.93km²(国土交通省都市局より)を飲み込んだ。その結果、同町の津波による人的被害は、死者604人、行方不明者153人、負傷者不明となった。また住家被害は、全壊2,762棟、半壊405棟となった。

震災による消防団の人的被害は、死者9名であった。また震災によって7件の火災が発生したこ

とが地元の消防本部の調査により確認されている。特に田の浜地区では、3件の火災及び大規模な山林火災が発生した。消火栓は地震直後の停電又は配管の損傷もあり、水圧がなく使用不可能であった。また防火水槽の水も数分でなくなってしまふなど、消火活動は困難を極めた。

消防団員として、何ができるのか…

私が消防団に入団したのは、22歳の時でしたので、もう消防団歴は26年になります。私はその頃から田の浜に住んでいて、漁師を始めたのもちょうどその頃でした。親父が消防団員だったこともあり、何より“自分にも何かできないか”という思いで、消防団員からの勧誘をきっかけに入団することを決めました。当時はこの歳まで消防団を続けるとは思っていませんでした。まして分団長になるとも思っていませんでした。

私が所属している第2分団は、分団長1名、副分団長1名、部長1名、班長4名の役員と19名の団員で構成されています。年齢的には、一番下が21歳で一番上が私で47歳です。前任役員が次々と退団し、結局私が分団長になることになりました。ちょうど私たちの上の世代が抜けた感じですね。それで今の年齢構成になっています。比較的若い人たちが構成された分団だとは思っていません。

団員の職業は、サラリーマンと漁業関係者が約半分の割合だと思います。そのため、平日の昼間は地区にいない人も多いです。第2分団が管轄するエリアには約460世帯、1,200人くらいが居住しています。

東日本大震災の2日前にも水門を閉めた

各種訓練を含め消防団としての年間活動回数は、30回程度だと思います。もちろんその年によってバラツキはありますが…。消防活動とは関係ありませんが、地域のお祭りやいろいろな行事にも参加していました。地域に若い人が少なくなってきたこともあって声がかかるのです。

緊急時の団員の集合状況ですが、大体20名近くは集まるので平均すると7割くらいは集まっています。団員の半数を占めるサラリーマンは、会社に消防団員として届出をしているため、忙しい人を除いて集合しています。

第2分団の消防装備状況は、ポンプ車が1台、小型ポンプが1台、そして通信機材として無線機が4台配備されています。無線機はポンプ車に1台が備え付けで、あとはハンディタイプのものが3台です。どれもデジタルとアナログに対応したものです。

東日本大震災の2日前にも津波注意報が発表されましたが、そのときは担当エリア内にある10箇所の水門や門扉をすべて閉鎖しました。分団の中では、誰がどこの水門や門扉を閉めるという取り決めはありません。誰が集まってくるかわかりませんので。その時々で柔軟に対応しているのが現状です。

無線を使う余裕もなく水門にまっしぐら

地震当日は、ちょうど漁が終わった後で、自宅に帰ってくつろいでいた時でした。緊急地震速報がピーッと鳴り出したので、急いで外に出まし



第2分団屯所

た。緊急地震速報の鳴った後10秒くらいあるかないかで地震が来ました。いったん揺れが収まったような気がしたのですが、またすぐ大きな揺れが来たので、その場に小さくしゃがんで動けなかつたくらいでした。

2回目の大きな揺れが収まった後に、水門を閉めなくてはならないので、急いで屯所に向かって動き出しました。しかしその日、ポンプ車は車検に出して使えなかったのも、自分の車で水門のあるところまで向かったのです。地震の際に水門の場所まで行ける団員は限られているのですが、みんなあんな大きな地震が来たら津波が来ることは分かっていたので、パニックで無線を使う余裕などありませんでした。今回は水門には14、15人くらい集まったと思います。津波が来た時に心配と思われる水門は全部閉めました。

水門を閉め終わった後にその場所で海面監視をしていました。すでに避難をしている人は船の沖出しをしている人だけでした。船が出せなくて亡くなった方もいるけれど、何人亡くなっているのかは今もわからない状態です。それでも津波が来るギリギリまでその場所で監視活動を続けていた時に車検に出ていたはずのポンプ車を持ってきてくれた団員がいました。それに乗って避難するよう呼びかけながら屯所まで行きました。

屯所に着いた後、いよいよ津波が来たのです。停まっていたバスが横転して瓦礫に押し流されて、瓦礫がどんどん高くなってきました。そうしたらもう、地面がなくなって下の方が見えない状



田の浜地区の沿岸部

態で、この地域の建物は全部流されてしまったのです。もう何波来たのかは全くわからない状態でした。この地域では1割くらいの人亡くなりました。地域の人、だいたい指定の避難所に逃げていたのですが、避難所の1階に津波が迫ってきたものですから、1階にいる人は「ここはダメだ」ってことで避難場所の2階に移動することになりました。でも、津波が来ていない状態から避難した方でも、高齢者や体の不自由な方は津波に巻き込まれて犠牲になってしまった方もいました。団員に犠牲者は出なかったのですが、団員の家族6人が犠牲になりました。

難航する救助活動、瓦礫からの出火

津波がある程度収まったあたりから、屯所からみんなそれぞれが自発的に救助活動に移りました。でも思うようにいかない場面でもあったのです。救助活動をしようと思っても、第2波、第3波が来るという放送もありましたし、瓦礫で海の方には行けないので、その場にいる目に見える人を救助するのがやっとでした。救助活動中は家族との連絡もままならない状態で、避難の時には避難するのに必死ですから、誰がどこに逃げているのかも把握できない状況でした。あの瓦礫の中ですから、団員が救助できたのは2人くらいで、その他は地域の人で救助活動を行ったと聞いています。瓦礫の中から救助された人が何人いるのかもわからない状態でした。

津波が来てから10分くらいで瓦礫の中から火が

付き始めて。最初は小さな火でしたが、そのまま流されていってそれが全体に飛び火していったのです。それを消火するのですが、防火水槽の水量にも限界がありますし、常備消防も動けないだろうから、団員がポンプ車で消火活動に向かうしかありませんでした。ポンプ車がなかったら何もできませんでした。火災が大きくなって千人くらいいる住民の避難も必要になり、3日3晩不眠不休で住民の避難支援と消火活動にあたりました。また、アマチュア無線をやっている方がいて、それで自衛隊に連絡することができたのも幸いでした。でも、その後、最終的な鎮火には1か月近くかかったのです。

消防団に入って良かった

この地域では、水道が止まって火災を食い止められなかったのが一番の課題だと思います。火災を早く止められれば、早く捜索も出来たはずで。津波浸水の恐れがない場所に大きな防火水槽があったら良かったと思います。津波による瓦礫で海にも近づけず海水を消火活動に使えませんでした。犠牲者を減らすためには避難路の確保が重要だと感じました。また、1度避難してまた自宅に戻って被害に遭ったという方もいるので、避難したら戻らないということも必要だと思います。

消防団の中で引き継がれてきた言い伝えのことを思い出します。「自分は自分で守れ！」やっばり今回は、それしかないのかなって。お年寄りを助けようとした若い人も亡くなっていますから。人を助けてまで流されて良いのか悪いのか。そう感じるころもあるのです。

今振り返ると、消防団に入っていて良かったと思っています。このような大きな災害で、まずは人のためになれたこと、そして消火活動や救助活動など消防団員としての役割りを精いっぱいできたのではないかと自負しています。

あとどのくらい続けられるかわかりませんが、いまは消防団を続けていきたいと思っています。

今まで以上に深まった“絆”

岩手県山田町消防団
第4分団 分団長

昆 定夫 (57歳)
消防団歴 35年 (漁業)



まさか、分団長になるとは…

私が消防団に入団したのは、前分団長に誘われたのがきっかけでした。当時の第4分団は高齢化が進んでいましたので、世代交代という意味もあったのだと思います。私が消防団に誘われたとき欠員は2名でした。当時仲の良い同級生が3人で、3人一緒に入団させてもらう条件で入団することになりました。現在消防団に残っているのは私一人です。

当時の消防団は厳しい世界で、分団長の言うことは絶対でした。こういう世界に合わずに辞めていく人もいたと思います。

そこで私は、辞めていく人をつくるような消防団のあり方はどうかと思い、皆の意見を聞くように心がけ、気が付けば分団長になっていました。

入団当時は分団長になるとは夢にも思っていませんでした。私もあと少しで還暦なので、周りにはもうそろそろ辞めようかと言っていたのです。その矢先に東日本大震災が発生しました。

第4分団は織笠（礼堂、馬指野、田子の木、外山を除く）・新田地区を管轄区域とする27名の団員で組織されています。最年少は24歳で、最高齢が60歳です。

最高齢の方は船乗りをしている方で、年齢的に結構あとの方に入団したのです。そして管轄する地区には、680世帯が暮らしていて比較的高齢者



第4分団担当区域を一望

の多い地区だと思っています。

津波に備えて水門を管理

消防団としての年間活動日数は30日くらいでしょうか。行事としては消防訓練、年末年始やお盆の警戒などが主な内容です。

ただ水門管理を委託されていることもあって、水門の掃除や巡回、そして冬には防災水槽の除雪などもやっているのですが、実際はもっと活動しているのが現状です。

仕事で宮古市や釜石市に行っているサラリーマン団員もいるので、実際の災害時に集まるのは、通常は7、8名くらいだと思います。

津波災害対応として私たちが担う役割は、水門操作、避難誘導、交通整理、そして火災発生時の



流出した屯所跡



無残な姿となった屯所の望楼

消火活動です。

また私が消防団の部長だった頃から、小中学校には“津波発生時には子どもたちを親に帰さないように”と事あるごとに言っていました。子どもたちの体験学習をやっていたので、そのときに校長や教頭先生に言っていたのです。小中学校が避難所になっているので、そこが安全なのですから。

1羽も姿を見せなくなっていたカモメ

地震発生の日は、従妹の初七日でした。私は、初七日に集まるお客さんに振る舞うためのホタテを息子と二人で採っていました。沖から戻ってきたのがちょうど昼の12時頃だったと思います。そして余分に採ってきたホタテを、東京に住む妹にも送ってあげようと船越にある宅配便会社に行き、事務所で手続きを終えたあと、あの地震が来しました。

揺れはとても強くて、宅配便会社の事務所はものすごく揺れていたのを覚えています。私は、揺れている最中に事務所の中にいた女性従業員を全員外に出し、私の車につかまるように言いました。揺れが収まったあと、私はすぐに自宅に行き、その後屯所に向かいました。

当時自宅には、家族が皆いました。そして「すぐに逃げろ！」と声をかけ、後で叔母さんの所に逃げたと聞きました。それが分かったのは震災か

ら4、5日後のことでした。

家族に逃げるよう伝えた後、とにかく屯所に向かいました。そして、屯所でポンプ車に乗り換えて水門を閉めに行きました。

水門を閉めようと思ったら、誰かのいたずらだと思いますがその水門は、通常の高さを超え、目一杯上にあがっていました。ただこれが私の命を救うことになりました。もしあそこで水門操作に時間がかからなかったら、私は屯所に戻っていたはずです。もし屯所に入っていたら、屯所の建物もろとも津波に巻き込まれていたと思います。

防災行政無線ですが、最初は、津波の予想は3mとアナウンスしていました。これが最初から10mとアナウンスしていればもう少し状況は変わっていたことでしょう。

これはあとになって気付いたことなのですが、いつもは沖にあるホタテの養殖筏には、大量のカモメがいるのですが、でもその日に限って1羽もいなかったのです。今思うとカモメは何かを予感していたのもしれません。

水門をいつもと違う順番で操作

水門を閉める操作をする際に、なぜかは分かりませんがいつもと違う順番で操作していました。最終的にはそのとっさの行動が私の命を救ってくれたのです。

水門操作は、海の手前から閉めるのが通常でし

たが、でもあのときは違っていました。なぜかは分かりませんが、やはりあの大きな地震が私にそう直感させたのだと思います。もしいつものように水門操作を行っていたら、私は確実に津波に飲まれ、さらに一緒に作業していた団員たちの命も奪っていたと思います。

ゲート操作を終えた私はゲートの階段を下り、海の方を見ていました。すると、橋の橋脚のところの水位が見る見る上がるのを確認しました。そしてすぐに私はポンプ車に乗って、コミュニティセンターに向かって走りました。これは揺れが収まってから20分後くらいのことだったと思います。

説得している間に逃げ遅れた人も

大震災当日は十数人の救助を行いました。浸水エリアの中でも津波の勢いに差があり、場所によって津波の押し引きの小さな箇所がありました。水たまりのようなところでした。

運良く津波に飲まれてもその水たまりのような場所にいた人は助けることが出来ました。後から聞いた話ですが、歩くことができない老人や寝たきりの老人のいる家族の人が亡くなっている例が多いようです。

これは、身体の不自由な老人をどうにか避難させようと説得しているうちに津波に飲まれてしまったようです。もし家族の説得に応じて避難していれば、助かった人も多くいたのではないのでしょうか。私は「年を取ったら若い者のいうことを聞くべき」と言いたいです。

水門操作の鍵は共通のものに

命を亡くされた方のうち、身体の不自由な老人を避難させようと説得している間に津波に飲まれた方が比較的多くいるように思います。車で避難や避難時の車を円滑に避難させることが出来る



閉鎖操作した水門

避難道路の整備も重要だと思います。また小中学校では、津波注意報や津波警報が出たら絶対に親に返さないことが大事だと思います。私は以前より実践していますが、特にこの地区の避難所になっているのが小中学校なので、わざわざ安全な場所から移動させる必要はありません。

消防団の活動として、水門操作が消防団の仕事となっている以上、水門操作を少しでも機能的なものにするため、水門の操作ハンドルの鍵はすべて共通のものにして頂きたいです。鍵が違うということは操作の時間を遅らせるだけですから。

屯所で寝泊まりした日々

消防団に入って私は良かったと思っています。ただし、今回の大震災を振り返ると、消防団員の家族は複雑な心境だったと思います。

私自身は、家族を心配するよりも目の前の消防活動で精いっぱいだったので、家族には心配をかけたと思います。

ただし、間借りした第5分団の屯所で団員たちと寝泊まりし、いろいろなことを話し合う中で、今まで以上に“絆”が深まったのも確かだと感じています。

「おまえのおかげで助かった」の感謝のことばを胸に

岩手県大槌町消防団
第2分団 部長

鈴木 亨 (42歳)
消防団歴 23年 (漁協勤務)



大槌町の概要と被害状況

大槌町は、岩手県の沿岸部に位置し、北に山田町・南に釜石市・西を遠野市に隣接している。総面積200.59km²で推計人口1万5,276人（平成22年現在）の水産業を主産業としている町である。作家井上ひさしが執筆した小説「吉里吉里人」で脚光を浴びた吉里吉里国は、大槌町がモデルである。大槌町の消防団は、5分団構成で団員数217人（平成21年4月時点）であった。

3月11日の津波は、大槌町の隣接市である釜石市の検潮所で14時45分に10cmの引き波が観測されたが、その後15時21分に4.1m以上となった以降検潮所が障害となったこともあって記録は残されていない。大槌消防署の資料によれば津波が大槌町に襲来したのは15時20分頃であったようで、翌日にかけて13波の津波が大槌を襲ってきた。震災による大槌町の人的被害は、死者803人、行方不明者479人、負傷者不明であった。住家被害は、全壊3,092棟、半壊625棟であった。

消防団の人的被害は、平成23年8月31日時点で死者11名、行方不明者5名であり、物的被害は、7箇所の消防屯所が全壊流失し、消防ポンプ車1台が焼失、3台の小型動力ポンプ付積載車が流失している。津波襲来後に浸水域内で多発的に火災が発生し、山沿いの建物に延焼し、山林火災が発生している。



津波直後の安渡地区火災（鈴木亨氏撮影）

消防団員に憧れて消防団に入る

私は、この大槌で生まれ、育ちました。叔父さんが消防団に入っていて、子どもの頃、消防ポンプ車に乗せてもらって、「消防」に触れ合う機会が多かったので、ずっと消防職員に憧れていたんです。消防団に入ったのが平成元年ですから団歴23年になります。仕事は、漁業協同組合に勤めています。

所属する大槌町消防団第2分団は、震災前で分団長と副分団長以下、3部構成になっており、第1部が13名、第2部が13名、第3部が14名の総数42名です。町の条例定数は、1部あたり16名なので欠員状態でした。私は、第2分団第2部に所属しています。分団1個部の消防装備は、消防ポンプ車が1台、ポンプ車に積載している資機材や団



15時21分大槌川堤防を越流し安渡地区に襲来する津波
(鈴木亨氏撮影)

で購入したAEDなど、団として通信できる専用波の無線機は車載無線が1台と携帯無線を部長用と分団長用に各1台がありました。

第2分団は、安渡地区と赤浜地区を担当しており、第1部と第2部は安渡地区を担当し、第3部は赤浜地区を担当していました。第1部と第2部の屯所は海岸沿いの同一建物で、担当エリアも隣同士だったので、団員はその時々々の参集状況によって第1部、第2部に拘り無く消防活動を実施していました。

昼夜を問わず水門を閉鎖できる体制

大槌湾から大槌川にかけて市街地を守るように防潮堤があり、安渡地区内堤防には12箇所もの水門があるので、大地震の発生後、まずは水門の閉鎖操作を先に行い、その後避難誘導を行っていました。

水門閉鎖については、3月3日に行う津波避難訓練に併せて分団では、平日昼間を想定した訓練や夜間を想定した訓練など起こりうる事を想定しながら、これまで実施してきたのです。

その中で昼間は、それぞれの団員がいる場所から近い水門を閉鎖してから屯所に集まるルールにしました。

閉鎖の基準は、町の水門管理規定に基づき震度4以上になったら操作をすることになっていました。それも第1部と第2部は、それぞれの消防ポ

ンプ車の行動範囲は決めていましたが、乗る団員はその時々で臨機応変に運用していました。

1年前のチリ地震津波の時は、前日から津波が来るだろうかと分かっていたので水門閉鎖した後、ポンプ車で避難誘導をし、小学校と大槌稲荷神社が避難所になっているのでその付近で待機していました。根っからの大槌の人は、小学校で津波のことを習うので津波に対する意識は高いと思います。

チリ地震津波の時は、堤防の近くの人たちや水産業の人たちは、逃げていたと思います。でも少し高台の街中の人たちは逃げない人も多かったと思います。

漁協にて地震に遭遇、揺れの最中に水門へ

3月11日は、勤め先の漁協の冷凍倉庫にいました。地震の揺れがどんどん大きくなったので津波が来ると思って、同僚に津波が来るから逃げようという、揺れている最中に自家用車で水門に向かいました。子どもの頃から「地震があったら津波と思え、津波があったら高台に逃げろ」を教え込まれて来たのです。

向かった水門は、魚市場に一番近いところがありました。あのときは、揺れ始めてから30秒ほどで停電したので、水門の自家発電機が起動して閉めることが出来ました。水門が半分近く閉まるのを見届けてから自宅に向かいました。

自宅の前にいた母と近隣の奥さんに「津波が来るから裏山に逃げろ」と伝えて、自宅に置いていた救命胴衣を着て、300mくらい離れた屯所に行きました。

屯所でサイレンを鳴らそうとしましたが、停電で鳴りませんでした。そのため車庫のポンプ車のサイレンを鳴らしながら他の団員が参集するのを待ちました。数分してから1名の団員が参集して来ましたが日中なので他の団員も集まらないと判断して私とその団員の2名で消防ポンプ車に乗って次の水門に移動しました。その水門を閉めてい



る時に、別の団員が自家用車で来たので他の水門に行くようお願いしたのです。そこでポンプ車のラジオで大津波警報が発表されていることを知りました。

それから2箇所の水門を閉鎖して15時頃に屯所に戻りました。屯所で3人目の団員を乗せてから再出場しました。そこで第2部のポンプ車と合流し水門閉鎖が完了したことを確認したのです。時計を見たら15時4分でした。水門閉鎖に要した時間は、地震発生から18分でした。その場所で街中に入する一般の自動車を迂回させるために看板を設置しました。

自宅に戻りたい人が多く、車で来て「通せ、通さない」があって大変だったのを記憶しています。

第2部のポンプ車は、私服の団員もいたので装備の着装もあって屯所に戻って行きました。それから第2部のポンプ車が屯所から出動するのが見えたので、時計を見たこともあって覚えているのですが15時15分頃だったと思います。

我々は、海岸から戻ってきたパトカーから「潮が引いてきた」との報告、そして第3分団の無線から「津波が来た」との情報を受け、すぐに街中を「津波だ逃げろ！」の連呼で走り回りました。

大槌川の河口部で水位が上がってきたのを確認してから高台に逃げたんです。

そんな中でも津波見たさに堤防に人がいて、また津波を見に行っている中学生たちもいて「お前たち死ぬぞ!!」と叫ぶように言ったのを覚えてい



第2分団3部の消防ポンプ車。分団員3名が運命を共にした
(鈴木亨氏撮影)



瓦礫の中から見つかった第2分団第1部第2部屯所の火の見櫓
(鈴木亨氏撮影)

ます。その子どもたちはびっくりして高台へ避難して、たぶん助かったと思います。我々は小学校裏の高台にポンプ車で避難しました。

命を懸けた消防活動

今回の大震災で津波の犠牲になった第2分団の団員は、11名でした。自分自身が活動中は必死でしたから、その後聞いたり、ケガをしながらも助かった方に聞いた話です。従って少し事実と異なるかもしれませんが。しかし犠牲となった団員の活動や活躍を残して行くことが大事だと思っていますのでお伝えしたいと思います。

第2分団第2部のポンプ車は、6名の団員が乗っていました。屯所に寄った後、河口の堤防沿いに車を止めて津波を監視したようです。津波が来ているのを確認してから、急いで戻る途中で、寝たきりの家族を助けて欲しいと依頼され、5名の団員はその家に助けに入りたいです。その直後に堤防を越えてきた津波に巻き込まれて家ごと流されたようです。1名の団員がケガを負いながらも助かったので後で知ることが出来たのです。

さらに1名は、水門付近で逃げ遅れた人を確認中に犠牲になっています。また1名は、自家用車で避難誘導中に津波に巻き込まれています。第3部の3名は、水門を閉鎖してから避難誘導後に第3部の屯所で車ごと巻き込まれたと聞きました。

最後の方は、私の消防団の先輩でもあり仲間です。1部2部の屯所の屋上で半鐘を鳴らし続けながら津波に襲われて亡くなったのです。半鐘の音が避難所や神社にいても聞こえた後から町民に聞きました。津波が堤防を越えてから屯所に到達するまで聞こえていたようです。この先輩とは、大地震の直後に、屯所で会っているのです。

丁度、自家用車で駆けつけて来たのでポンプ車に乗り移るように言ったのですが「いいから行け！」と言われて、てっきり自家用だったので車で活動しながら避難されるんだろうと思って、それ以上言わなかったのです。ご本人は、そのときから半鐘を鳴らし続けるつもりでいたのかもしれませんが。この方は、途中出稼ぎされていたので、団歴は20年で地元では大工さんをされていて、大震災前には大工仕事も少なくなったので地元の造り酒屋でアルバイトをしていたのです。あのときも地元にいたので早く駆けつけることが出来たと思います。熱血漢で厳しく若手の団員を指導され、人から慕われる人でした。

4か月も続いた消防活動

第2分団の団員が揃ったのは、その日の夜でした。津波が襲ってきた直後に火災が至るところで発生しました。消火に向かおうとしましたが、沢山の瓦礫で身動きがとれず消火活動に入れません

でした。そのためひどい災害で茫然自失状態のご老人もいて、近くの老人ホームに搬送したり出来ることをやりました。

市街地の火災は、津波の流れに乗って次第に山に移って行きました。内陸の第4分団や第5分団から小型ポンプを持って70名ほどの団員が駆けつけてくれました。ポンプ車よりも小型ポンプは小回りが利きます。川の水利を使うしか無かったので山林火災の消火活動に大変助かりました。

3月13日から緊急消防援助隊や自衛隊が来て、遺体捜索は装備のしっかりとしたそれらの部隊に任せて、我々は山林火災の消火に活動の重点を移行しました。

その後、ポンプや車の燃料に困ったことがありましたが、なんとか消火活動も続けることが出来て、ようやく鎮火したのは4月5日になってからでした。

最初の頃は、ポンプ車に寝泊まりするような状態でした、消防活動が非常体制から待機体制になるまでの1か月が一番きつかったと思います。

精神的にも一段落したのは、7月に入ってからでした。今（8月末）は、仕事も吉里吉里に仮の事務所が出来てそこで働いています。

津波から地域を守るために

今回の災害を通して、住民個々の命を守るために必要なこととお話したいと思います。

少なくとも津波が襲ってくる可能性のある地域は、小学校から防災教育を徹底すべきだと思います。私自身もそうでしたから、訓練や教育によって得ることは多いですね。もちろん防潮堤などの防災施設も必要です。防潮堤があったために津波が地域に入ってくるのを遅らせることが出来ました。それによって逃げる事が出来た人もいたでしょう。施設がなくても逃げればいぐらいにならないと駄目だと思います。消防団が子どもたちを対象に普段から津波教育をすることも必要であると考えます。



被災後の大槌町消防団第2分団第1部第2部仮設屯所。右側が町から貸与されたもの仮設屯所。左側が分団でリース契約した屯所事務室兼待機室。

我々の分団では11名の団員が犠牲になりました。団員の命を守ることが重要です。そのためには、

- 水門はない方がいい
- 住民は逃げる
- 消防団もサイレンで一巡したら逃げる
- 国は消防団も避難するという法的な裏付けを整備する

などが必要と思います。

今回、消防団本部の指揮車から「津波が来ている。退避指示」が15時10分前後に何回か指令されたのです。でも住民が残っているのを分かっている消防団は逃げることはできません。そこを後押しする制度が必要と考えます。

仲間のことを伝えて行きたい

消防団に入って良かったと思っています。震災のあと「おまえのおかげで助かった」「逃げろと言われてなければ、家にそのまま居たと思う。津波から逃げられなかったはず」と感謝の言葉が嬉しかった。でも多くの仲間を亡くしました。仲間には、逃げて欲しかった。助かって欲しかった。彼らを忘れないためにも、その活動を記録に残すべきです。私はこれからも彼らのことを伝えて行きたいと思っています。

「やっぱり消防に入って良かったですよ」

岩手県大槌町消防団
第3分団 分団長

外館 竹男 (55歳)
消防団歴 37年 (建設業)



人生観を変えた消防団

消防団に入って37年目になります。17歳の時、親に入れと言われたので入りました。親父の知り合いが分団長、副分団長でした。地域の人顔を知っていて、誰が消防団にいるのかも知っていたので抵抗はなかったですね。益々、自分も地域の中で何かできるなと思いました。

消防団に入って人生観は変わりましたね。元々、自分は好き勝手やっている方だったのですが、地域活動をしているうちに、自分を立ててくれる人に応えないと、地域の為に何かしないといけないなと思いましたね。姿勢にも厳しくて、精神面でもかなり鍛えられました。

分団長は今年で3年目です。なろうとは思わなかったけど、先輩からは、17歳で入って40年もやるから、分団長になるぞって、しょっちゅう言われましたね。先輩からは期待はされていたと思います。1、2年目から消防操法の県大会を目指して練習に出たりしていましたから、県大会は3回くらい行きました。昔は大槌・釜石地区で予選を行っていて、釜石には絶対に負けないって自負はありましたね。活動だけでなくレクリエーションで旅行や野球をしたり、仲間づくりしながらやっていました。地域の中で一緒に色々やるような感じでした。

第3分団は第1部、第2部、第3部となってい



吉里吉里地区第3分団屯所

ます。第3部が浪板地区を担当していて、第1部第2部は同じ屯所で、同じ活動をしています。名義上は分けていますが、活動範囲が広く、分けると面倒になるので活動は一緒になっています。団員数は震災前で45名でした。構成は分団長が1名、副分団長が1名、部長が3名、団員が40名です。

団員は結構若いんです。一番若いのは22、23歳かな。50代も3名だけ、分団長、副分団長、第3部の部長それだけです。昔は各世代にいたのですが、自分の後輩にあたる人間が辞めてしまったり、本当なら自分もとっくに終えていなければいけなかったんです。自分と今の部長との間に10歳の年齢差があるんです。本当はその間に10名くらいいたのですが、皆辞めてしまって、それで若い人を入れて、上がってくるまでは自分も頑張らないといけないと。

消防団の装備は、第1部と第2部にポンプ車が一台ずつあります。第3部は可搬ポンプを積んだ積載車です。無線はポンプ車に一台付いていて、携帯無線もあるのですが、最近は調子が悪いのです。調子が良くても山を挟むと通信ができないのです。前々から町長に性能の良いトランシーバーを買ってくれと頼んでいるのですが、デジタルになるまで待ってくれとのことでした。



吉里吉里地区内の水門

大震災前の消防活動

正月、盆に特別警戒があって、火災防御訓練を毎年秋頃に1回やっています。12月から3月一杯までは交代で屯所に8時から11時まで詰めて夜警をしています。普段の夜警は3名でローテーション制です。第3部は3部で、第1部と第2部は合同で、10日間の当番でしていました。震災後もやっています、やることはちゃんとやろうと。

火災はなかったです、第3分団管内では6月に700日連続になりました。夜警や広報の結果かなと思います。年間の出勤回数は頻繁ではないけど色々出ていました。

3月9日の地震発生時は、水門の操作を6箇所やって、避難誘導をして、高台の上から警戒をしていました。門扉も注意報を確認してすぐに閉めました。その際、交通量が多いので1箇所を少し開けて、そのために団員が付いていました。

避難場所は吉里吉里小学校、吉里吉里中学校、旧吉里吉里中学校、あとは吉祥寺です。最初は近くにある小、中学校に行きます。吉祥寺は高いところであって、危険度が上がった時に行きます。山田線の線路が通っているので、小、中学校で安全というのがありますので。

3月9日は避難した住民は100人もいませんでした。大槌町では3月3日に避難訓練を町内会で段取りを組んで行うのですが、その時は結構な人数が避難します。だけどいざ災害となると、門扉を閉めても海岸に行きたい人もいて、危機感は足りませんね。

救助をしながら吉里吉里へ向かう

3月11日は、地震発生時は仕事で、釜石市の野田で新築の現場にいました。揺れ始めた時は柱にすがって、ただ事ではないなと思って、現場にいる釜石の消防団の人と絶対津波が来ると話していました。

揺れが収まったと同時に車を飛ばして大槌町に向かいました。国道を通ったら止められるので、裏道の山道を通って、鶴住居のバイパスを下りました。そこまでは海の様子に変化はなかったです。鶴住居の国道を走って、もう少しで大槌町まで来たら、道路脇の駐車場にある車が流れていたのです。もう少し行ったら、鉄橋の下から水が流れてくるのが見えました。危機一髪で大槌町に行きました。

大槌町に着いてトンネルを抜けたら、もう津波は来ていました。家が流されていて、自分の住んでいる吉里吉里地区を見たら黒い煙が見えて、只事じゃないなと思いました。瓦礫が流れてきたので車はそこから進めなくなりました。15時30分頃でした。その間ラジオはつけて聞いていました。

それから少しして、ちょっと水が引けたかなと思って強行突破しようとしたのですが、トンネルを進むと、津波だって騒いでいる人がいて、見ると家が流されていました。Uターンして戻って、コンビニエンスストアの近くで瓦礫の中から人を助けているのを手伝い、国道の所に連れて行って

開放したら、そこに水が来たので、その人を古廟会館に走って連れて行きました。

それから徒歩で何とか吉里吉里地区に行こうとしたら、トンネルの方で、浸水した家の屋根に人が見えました。見たからには何とかしないとけないと思って、ロープを借りてアルミの梯子を使いその人の所まで行って、その人を助けて背負い水の中を歩いて50mくらい行った山際の家まで行って、そこに預けました。

また吉里吉里地区に向かって歩いて行ったら、たまたま知り合いが車で来たので、一緒に吉里吉里地区まで行きました。その時はまだ明るかったですね。その時に聞いた状況が、1、2、3丁目は無いから駄目だという事でした。

団員を纏め、体制を整える

最初は自分の家に行って親の安全を確認しました。家族は無事でした。それから小学校に行きました。その時に第3部の団員から部長が流されて亡くなったと聞きました。小学校に着くと、団員が集まっていました。皆、びっくりしていました。釜石市からここまで来られないだろうと思っていたみたいで。

消防団員が今から遺体捜索に行くと言っていたので、今から暗くなる時に何をやっているのだと喝を入れて、今夜は危ないから出るなど、明日の朝明るくなってから捜索に行くと、ストップをかけました。次の日から1か月くらいは、瓦礫撤去、道路の確保、遺体の捜索と何でもやってとにかく忙しかったです。吉里吉里地区ではその日のうちに、地元の観光会社にバスを3台借りて、小学校の校庭の真ん中に災害対策本部を大槌より前に独自に立ち上げたのです。炊き出しとか避難してきた人をどうするか自分たちで決めて。吉里吉里地区の災害対策本部は、前に分団長をやっていた人が長になりました。自分は動いていないとけない人間なので、団員をまとめるのが精いっぱいでした。地域の人も自分より何倍も上の人

なので、同じ年代の人に言ってもらう方が良いのかなと。会議とかも年いった人がまとめた方が良いのではないかなと。動くのは消防団主体でやって、まとめるのは年長者がやっていました。

命を懸けた団員の消防活動

地震発生時、第3分団の管内にいた団員は15名くらいですかね。

水門操作は2台のポンプ車で行いました。すぐに閉めて、そこに止まって津波が来るか堤防の上から見ていたそうです。それで本当に津波が来たから、尋常じゃないって事で、津波が来たと広報しながら回ったそうです。そのうち津波が堤防を超えてきたから、ポンプ車に乗って一番近い逃げ道で逃げたそうです。ポンプ車は無事でした。

第3部の方では、1回目の津波で流された人を国道の上から助けようとしている時に、団員が流されました。3名が積載車ごと流され、亡くなりました。遺体が見つかったのは1名だけです。

ホースをロープ代わりに使って助けようと思っていた時に、大きい波が来て一発でやられたそうです。お巡りさんが団員に「手伝おうか」と声をかけた直後だったそうです。

住民の方は、90人近く犠牲になりました。まさか自分の家まで津波が来るとは思わなかったみたいです。溺れた人の話を聞くと、最初は津波が来ると思ってなくて、来たと思ったらすぐ飲まれたそうです。

常に前を向いてコミュニケーションを図る

津波の次の日からは瓦礫撤去、道路の確保、遺体の捜索と何でもやりました。火災は起きなかったです。大槌で火事が起きたのを見ていたのもあって、絶対に火事が起きないように、タバコも含めて、火を使わないよう住民にも徹底させました。

遺体捜索をやって心が萎えた団員はいませんで

した。大槌町の方から心のケアを消防団に受けてもらいたいと言われていたのですが、第3分団では精神面で参ったという人はいなかったです。

団員には遺体を見たら、「災害で亡くなった人に何も罪はなくて、その人たちの死があって俺たちは生かされている。かえって守られているから遺体をちゃんと探して大事に扱え」と言っていました。だから淡々と探していましたよ。吉里吉里地区では、遺体が見つかるのと誰か分かるのです。だから見つかったら、「見つけて良かったな」ってなるのです。

震災の後も、団員は落ち込んでないですね。新団員も入れましたし、また入れようと思っています。常に前を向いてやっていかなければいけないので。結構終わってから集まって団員同士でコミュニケーションを図って、今度こんな訓練しようって話していたりする。これから活動に支障があるとしたら、今までであった屯所が無くなって、集まれる機会が無くなってきたこと。気持ちの面ではないです。

消防団員はまず自分の命を守れ

自分はいつも団員に言っているのですが、消防団員ってというのは、時として命を懸けなければならない。けど、自分の命と住民の命なら、まず自分を大事にしるって言っていますね。人を助けるには自分が万全でなければいけない。自分の家族もいますし、家族を悲しませてやることではないのです。結果的にそうなってしまったら仕方ない事ですけど。

だから危険なマネはするな、半分はボランティアでしているものだし、まず自分の安全を確保してから人を助けろと。無理なところには絶対に行くな、火の中に突っ込むような馬鹿な事はするなと言っています。それで怪我をしたり命を落とすことは悲しくなる。一般の人が亡くなるのは悲しいことですけど、それを助けようと思って、消防団員が犠牲になるのは本当に悲しいことだと思



津波が押し寄せる吉里吉里海岸

ます。誰も責めたくはないけど、誰も幸せにならない。人を生かすには自分が生きてなければならぬ、自分が万全の態勢で怪我もなくやれるから、初めてちゃんとした活動ができることなのであって、だから消防団員には常に自分を一番大事に、安全第一でやるようにしています。

今回、自分たちが被災して、人も亡くなって、まだ忘れないけど、10年もしたら薄れてくると思うから。自分がいるうちは、そうして言っていきたいと思います。団員も変わってくると思うし。今、下にいる団員が上に行った時に、下の団員にそう言ってもらいたいですね。こんな悲しい目にあったから、あんまり悲しいことはするなよって。

俺にとっての消防団は人生のすべて

俺にとっての消防団は人生のすべてだった。良い時も悪い時も危ない時もあったけど、地域の為にやってきたことだから、一言では言い表せないですね。

消防団に入って最高ですよ。人間こういう役に付いていると、どこに行っても恥ずかしくない歩き方が出来ますし、まっすぐ前を向いて歩いて行けます。自分がこういうことをやってきたっていう自負があるから。自分が消防団やってなかったら、ただの酒飲みだったかもしれないし。お酒は大好きです。消防に入って酒を教えられました、やっぱり消防に入って良かったですよ。